

## 『骸餘叢考』 訓譯卷十二之中

中 林 史 朗  
大 兼 健 寬  
新 名 主 考 美  
關 清 孝  
田 中 良 明

今回は、第十二卷中唯一残されていた三番目の長文である第三篇を登載させて頂く事となった。

これで十二卷は全て完了し、次回からは第十三卷の最初から、公刊させて頂く豫定である。この第十二卷の如く、前後數回に涉つて公刊（短文である四篇と五篇とは「卷十一・十二之下」に、長文三本中の一篇と一篇は「卷十二上」に）させて頂いた理由は、各卷中各篇の文章や内容の長短と、掲載紙の紙幅の制限等々が擧げられるものの、最大の理由が、水先案内人たる筆者の怠惰さに在る事は、言を待たない。例え駄馬の歩みに過ぎぬと無視される行爲であつたにしても、一巻中であたり入ったりと右往左往する進捗狀況が、決して譽められた事では無く、慚愧に堪えない所行である事は、筆者が一番能く理解している。

何故斯様な狀況か、一言附させて頂ければ、讀解作業と公刊作業とのタイムラグであると言えよう。この作業に着手

して略二十年程であるが、現在の讀解作業は、卷二十を每週銳意繼續中であり、實際の公刊作業は卷十二と言う狀況で、そこには八卷の差が存在する。この事は、實際の公刊作業時に當たっては、その卷の讀解を擔當された諸士が既に學窓を離れ、日本各地で多忙な日々を過ごして居られる、と言う現實が存在する。

筆者が、普段から日常的に連絡を取っていれば、何も問題は生じないのであるが、筆者自身も日々の業務に追われ、更に怠惰な性格が追い打ちをかけ、其の時に至らぬと連絡を出さないと言う愚かさ、現狀を將來しているのである。

幸い今年度は参加者が微増し、學部生二名、大學院生三名、社會人二名の七名で讀解を進めて居り、「缺卷だけは出すまい」との心意氣だけを糧に、細々と努力を重ねている。

この卷十二の中を擔當された諸士は、大兼健寛（現、漢學會會員）・新名主考美（現、神奈川県立横濱南養護學校非常勤講師）・關清孝（現、伊奈學園総合高等学校教諭）・田中長明（現、大東文化大學東洋研究所講師）の四人（五十音順）である。

平成二十七年季秋

識於黃虎洞

### 【原文】

3 新舊唐書有彼此互異者今據通鑑綱目唐鑑貞觀政要五代史北夢瑣言等書稍爲訂正於後

鄒國公薨舊書在武德二年五月新書在八月按綱目皇泰二年八月唐鄒國公薨隋之皇泰二年即唐高祖武德二年也薨以八月與新書同

突厥殺劉武周舊書在武德三年秋新書在武德五年秋按綱目書秦王世民擊宋金剛破之劉武周及金剛走死在武德三年夏四月而分注謂是時武周聞金剛敗懼而走突厥久之謀亡歸馬邑事泄爲突厥所殺其日久之則原非一時之事蓋武周之逃在三年而被殺在五年也

皇太子建成破劉黑闥舊書在武德五年冬新書在六年春按綱目武德五年冬淮陽王道元擊黑闥敗沒十一月始遣建成擊之十二月兵至昌樂黑闥亡走六年正月諸葛德威擒黑闥以獻斬之是破黑闥在五年冬斬黑闥在六年春舊書并爲一時誤

舊書元和四年十月立鄧王寧爲皇太子大赦新書立太子在是年閏三月大赦在十月按綱目是年閏三月制降緊囚蠲租稅此卽大赦也是月又書立鄧王寧爲皇太子是立太子在閏三月與新書同然綱目赦在前立太子在後非因立太子而赦也三書俱不合未知孰是李密致書唐公欲自爲盟主及唐公答書僞相推奉之事舊書赦在殺翟讓之後新書赦在殺翟讓之前按密自殺讓後聲勢益盛則致書高祖應在此時然通鑑綱目俱書此事在殺翟讓之前蓋密自取與洛倉讓推密稱魏公則已爲羣雄中巨擘而唐祖是時方起兵勝敗未可知故密以勢相凌有自爲盟主之意唐祖亦僞相推奉以驕之及密殺讓時唐祖已取長安密豈復敢以勢相凌也閱綱目所書先後次第自見舊書應誤

舊書江夏王道宗傳征高麗時道宗與李靖同爲先鋒新書則云與李勣同爲先鋒按靖傳征遼時靖已老太宗雖欲用之以其老不果而勣寔在行則道宗所同李勣非李靖也舊書誤

舊書魏元忠傳元忠陷周興獄詣市將刑則天以其平敬業功免死配流貴州方臨刑時則天先令傳聲監刑者遽欲釋之元忠曰未知敕虛實豈可造次徐待宣敕然後起謝尋詔還爲御史中丞又爲來俊臣侯思止所陷再流嶺南新書則以此臨刑傳敕事謂爲來俊臣所陷而俊臣獄之前先爲周興所陷當死以平揚楚功得流俊臣獄之後又爲侯思止所陷仍貶於嶺南是元忠凡三被流周興獄一也來俊臣獄二也侯思止獄三也舊書則僅周興一次俊臣思止并作一次凡兩被流而已然舊書又云前後三被流則天問曰卿何以累被得謗然則元忠在武后時被流者凡三當以新書爲是

舊書敬暉等誅張易之兄弟時薛季昶勸并誅武三思等暉與張柬之不肯及三思附韋后得柄柬之歎曰主上昔稱勇烈吾留諸武翼上自誅耳是不誅諸武由暉及柬之之誤也新書敬暉及桓彥範傳則謂季昶勸時暉亦苦諫而彥範不從是暉亦欲誅諸武者其誤乃由彥範也又以留諸武待上自誅之語爲彥範之言今按通鑑二張之誅也季昶謂柬之暉曰二兇雖除產祿猶在去草不除根終當復生二人曰大事已定彼猶机上肉耳是暉及柬之皆不肯誅諸武與舊書所記同其留諸武待上自誅之語亦以爲柬之所言然則當以舊書爲是舊書王同皎謀誅武三思爲同謀冉祖雍所告乃被殺新書謂宋之遜兄之間嘗舍同謀張仲家知其事令之遜之子曇密告三思按通鑑宋之問及弟之遜乃密告三思遂使人告同皎與武當丞周憬等謀殺三思廢皇后皆坐斬之問之遜竝除京官據此則告同皎者出於之遜兄弟况冉祖雍本黨於三思在五狗之列同皎豈肯與之同謀耶當以新書爲是

舊書謂王鉞權盛時雖李林甫亦畏之新書謂鉞雖得君然畏林甫謹事之按舊書安祿山傳李林甫爲相朝臣莫敢抗禮祿山來謁不甚罄折林甫召鉞至趨拜甚謹祿山乃悚息是鉞之事林甫固甚謹舊書既詳其事於祿山傳而鉞傳反云林甫亦畏之何耶

舊書韋見素傳祿山國忠爭寵時見素無所是非遂至凶逆犯順不措一言新書見素傳則謂祿山請以番將三十二人代漢將見素力言於帝謂祿山反狀甚明按綱目分注是時見素謂國忠曰祿山反狀明矣明日入見上迎謂曰卿等疑祿山耶見素極言反已有迹上不悅竟從祿山之請與新書同當以新書爲是

舊書安祿山傳楊國忠屢奏祿山必反天寶十二載上令輔瑒琳覘之得其厚賂還盛稱其忠國忠又云召必不至乃召之十三載謁於華清宮遂以爲左僕射遣回新書十三載祿山來謁華清宮明年國忠謀授祿山宰相制未下帝使輔瑒琳賜大柑因察之繆琳得厚賂還言無他帝遂不召據舊書則瑒琳之遣在十二年據新書則在十四年今按通鑑綱目二書十三載祿山入朝帝欲加以平章事國忠謂祿山目不知書乃以爲左僕射十四載國忠又請除祿山平章事召入朝而以賈循等分領祿山所部上從之已草制而不發更遣瑒琳覘之瑒琳得賂還言祿山無二心上謂國忠曰祿山必無異志朕自保之卿勿憂也乃止正與新書同當以新書爲是

貞元三年射生將韓欽緒等與妖僧李廣宏謀反舊書本紀謂欽緒以游瓊子特赦之新書本紀則云韓欽緒伏誅按舊書游瓊傳謂李廣

宏謀反事發德宗命內官捕其黨與斬之而不明言欽緒之或殺或赦新書遊環傳欽緒奔邠州中人捕斬以狀示游環游環懼并執欽緒二子送京師帝赦之既曰捕斬以狀示游環矣則欽緒已被斬可知也況遊環懼誅并以欽緒之子送京師敢匿欽緒乎通鑑欽緒亡抵邠州械送京師與軟奴〔卽廣宏〕等皆腰斬是欽緒之伏誅通鑑與新書皆同舊書所謂赦之者蓋誤以赦欽緒之子爲赦欽緒耳

魚朝恩之死舊書上罷朝恩觀軍容使會寒食入宴有詔留之朝恩懼言頰逆上亦不之責是日還第自經死新書則云宴罷朝恩將還營有詔留之帝責其異圖命左右擒縊殺之外無知者明日下詔罷其觀軍容使外人皆言既奉詔乃自縊云綱目所書亦與新書合則舊書所謂罷官後自縊死者非也蓋唐時國史本諱之舊書但仍其舊不暇改訂耳

舊書第五琦傳賀蘭進明遣琦奏事蜀中元宗大喜卽命爲江淮租庸使新書琦傳謂肅宗在彭原琦奏事訖卽言當今急務在財用帝乃令勾當江淮租庸使據舊書則元宗所命也據新書則肅宗所命也按通鑑進明遣參軍第五琦入蜀奏事琦言今方用兵財賦爲急財賦所產江淮居多乞假臣一職可使軍無乏用上皇悅以爲租庸使綱目亦書此事在上皇遣使以冊寶傳位肅宗之前然則琦之爲租庸使尙是元宗所命也當以舊書爲是

新書李泌傳德宗謂泌曰人言盧杞是姦邪朕殊不知泌曰此乃杞之所以爲姦邪也舊書記及李勉傳則俱以此語爲勉之言而泌傳不載按通鑑及綱目德宗與泌論卽位以來宰相曰盧杞忠清強介人言其姦邪朕殊不覺泌曰此乃杞之所以爲姦邪也倘陛下覺之豈有建中之亂乎與新書同舊書謂李勉者應誤

舊書本紀貞元元年正月始聞顏真卿爲李希烈所殺追贈司徒諡文忠新書本紀則書貞元元年八月李希烈殺宣慰使顏真卿據舊書是年正月已聞真卿被害則被害時尙在前也據新書則是年八月始被害也按綱目興元元年八月真卿爲希烈所殺貞元元年正月贈真卿司徒諡文忠是真卿被害於興元元年八月贈諡於次年正月與舊書同新書蓋誤以上年八月爲是年八月耳

舊書武宗會昌元年九月幽州軍亂逐其節度使史元忠推牙將陳行泰爲留後八月雄武軍使張絳奏行泰慘虐不可爲帥請以本鎮軍討之許之遂誅行泰詔以絳知兵馬使明年二月令知留後事仍賜名仲武是張仲武卽張絳也新書則云盧龍軍將陳行泰殺其節度使

史元忠自稱留後閏月軍將張絳殺行泰自稱留後十月軍亂逐絳雄武軍使張仲武入於幽州則仲武與絳截然兩人也按藩鎮傳行泰邀節度未報次將張絳殺行泰求帥武宗自用張仲武代之又通鑑盧龍軍亂殺節度使史元忠推陳行泰主留後務既而復亂殺行泰立張絳會雄武軍使張仲武起兵擊絳且遣吏奉表李德裕以爲其辭理較順可許乃詔以仲武爲留後是通鑑所紀與新書合仲武與絳明係兩人舊書謂絳即賜名仲武者誤

舊書宣宗大中四年九月幽州節度使周琳卒軍中立牙將張允伸爲留後新書則云盧龍軍亂逐其節度使張直方牙將張允伸自稱留後攻之藩鎮傳亦云張仲武卒子直方襲留後慮其下爲變逃奔京師軍中推張允伸爲留後是允伸之前即直方而無所謂周琳者然舊書張允伸傳大中四年戎帥周琳寢疾表允伸爲留後則允伸之留後得之周琳而非接自直方顯然明白又通鑑云盧龍節度使周琳薨軍中表請張允伸爲留後則與舊書相合是允伸之前有周琳新書謂直方後允伸卽爲留後者誤

舊書鄭畋傳畋鎮鳳翔抗黃巢會臥病以地當賊衝宜用武將乃薦李昌言自代而身自赴行在新書則云畋在軍府司馬李昌言襲之畋好語曰公能戢兵愛人爲國滅賊則守此可矣乃委軍去昌言自爲留後是畋之去寔昌言逐之也綱目分注亦謂昌言在興平因犒賞稍薄激怒其衆引軍還襲府城畋登城好語之乃委以留務卽日西赴行在與新書所記同舊書誤

舊書本紀寶應元年冬賊范陽尹李懷仙斬史朝義首來獻請降朝義傳亦云朝義走幽州賊帥李懷仙於莫州生擒之送款來降梟首至闕下新書本紀則云史朝義自殺其將李懷仙以幽州降朝義傳亦云朝義先奔莫州田承嗣給令還幽州以懷仙兵來再戰朝義遂出而承嗣卽以城降官軍朝義至范陽懷仙部將李抱忠不納謀奔兩番懷仙招之至幽州自縊死懷仙斬其首傳長安據此則朝義先至莫州後又至幽州縊死非被擒於莫州也綱目書此事云賊將田承嗣以莫州降李懷仙殺朝義傳首京師分注亦云朝義屢敗田承嗣說令往幽州起兵朝義既出承嗣卽降時朝義范陽節度使李懷仙已降朝義至不得入乃東奔欲入契丹懷仙遣兵追之朝義乃自縊懷仙斬首以獻所記雖與新書小異然其爲至幽州自縊則同非擒於莫州也當以新書爲據

舊書楊復光傳黃巢犯江西復光遣吳彥宏諭降之巢卽令尙君長奉表歸國宋威害其功擊之巢怒復亂朝廷誅尙君長新書復光傳則

云宋威擊王仙芝復光遣使約賊降仙芝遣尙長君如約威疾其功密請誅之故仙芝怨復叛黃巢傳亦云復光遣吳彥宏以詔諭賊仙芝遣蔡溫球楚彥威尙君長來降威陽許之上言與君長戰擒之乃斬君長仙芝怒還攻洪州據舊書則遣尙長君者黃巢也新書則王仙芝也按綱目明書乾符四年冬王仙芝遣尙長君請降宋威執以獻斬之而三年之冬分注謂仙芝攻蘄州刺史裴渥許爲秦官授以左神策軍押牙仙芝喜甚黃巢大怒謂仙芝獨取官去使此五千餘衆將安歸仙芝遂不受命分其軍二千餘人從仙芝及君長二千餘人從巢各分道而去是蘄州分兵之後君長常隨仙芝不復在巢所也然則遣君長降者乃仙芝非巢也當以新書爲是

新書沙陀傳天復元年李克用爲汴兵所敗朱友寧長驅圍太原克用與李嗣昭周德威謀奔雲中李存信謂不如奔北番國昌妻劉語克用曰王嘗笑王行瑜失城走而死奈何效之克用悟乃止據此則勸止克用者國昌妻也國昌乃克用之父其妻乃克用母也然五代史唐人傳云克用正室劉夫人明敏多智略當存信勸走入北番時夫人曰存信牧羊兒安足計成敗公常笑王行瑜棄邠州爲人所擒今乃自爲此乎則劉夫人乃克用妻也通鑑及北夢瑣言亦謂克用妻劉夫人勸克用固守其下又云夫人無子姬曹氏生存勗夫人待曹加厚是劉夫人之爲克用妻也明矣乃新書以爲國昌妻不知何據又通鑑謂是時克用甚懼嗣昭德威曰兒輩在此必能固守五代史嗣昭傳亦云存信勸奔雲州嗣昭爲爭以爲不可是二人亦不主出奔之策者也而舊書謂與二人謀奔雲州亦誤

舊書朱瑄傳汴師來攻瑄與妻出奔爲野人所害傳首汴州妻至汴爲尼新書瑄出奔野人執以獻朱全忠斬之而納其妻綱目分注又謂瑄棄城走野人執以獻其弟朱瑾時守兗州留其將康懷貞守城自出掠糧以給軍全忠遣將襲兗州獲瑾妻子瑾奔淮南全忠納瑾妻還張夫人請見之瑾妻拜夫人亦拜且泣曰克鄆與司空約爲兄弟以小故起兵相攻使吾姒辱於此他日汴州失守吾亦如吾姒之今日乎全忠乃出瑾妻而斬瑄五代史梁家人傳太祖已破朱瑾納其妻以歸張后見瑾妻云云〔與綱目同〕太祖乃送瑾妻爲尼后常給其衣食合二書以觀則全忠所納者瑾妻而非瑄妻也舊書謂瑾妻至汴爲尼新書謂全忠斬瑄而納其妻則皆謂瑾妻也獨是五代史本歐公所作唐書亦歐公總裁何以竝不參訂耶又按五代史瑾傳瑾歸淮南後以殺徐知訓被族妻陶氏臨刑而泣其妾曰何爲泣乎今行見公矣陶氏收淚欣然就戮此蓋逃奔江南後再娶之妻也〔北夢瑣言亦以爲瑾妻〕

【校勘】

○傳—壽考堂本「使」に作る。湛貽堂本に據り改む。

【書き下し文】

新舊唐書に彼此互ひに異なる者有り。今、通鑑・綱目・唐鑑・貞觀政要・五代史・北夢瑣言等の書に據りて稍々訂正を後に爲す。

鄒國公の薨は、舊書は「武德二年五月」に在り。新書は「八月」に在り。按ずるに綱目に「皇泰二年八月、唐の鄒國公薨ず」と。隋の皇泰二年は、即ち唐高祖の武德二年なり。薨に八月を以てするは、新書と同じ。

突厥 劉武周を殺すこと、舊書は武德三年秋に在り、新書は武德五年秋に在り。按ずるに綱目は「秦王世民 宋金剛を撃ちて之を破り、劉武周及び金剛走げ死す」と書し、武德三年夏四月に在り。而して分注は「是の時武周 金剛の敗るるを聞き、懼れて突厥に走げ、之に久しくして馬邑に亡歸するを謀り、事泄れ突厥の殺す所と爲る」と謂ふ。其の「之に久しくする」と曰はば則ち原より一時の事に非ず。蓋し武周の逃ぐるは三年に在り、而して殺さるるは五年に在るなり。皇太子建成 劉黑闥を破る。舊書は「武德五年冬」に在り、新書は「六年春」に在り。按ずるに綱目に「武德五年冬、淮陽王道元 黑闥を撃つも、敗没す。十一月、始めて建成を遣はして之を撃たしむ。十二月、兵 昌樂に至りて、黑闥亡走す。六年正月、諸葛德威 黑闥を擒へ、以て獻す。之を斬る」と。是れ黑闥を破るは五年冬に在り、黑闥を斬るは六年春に在り。舊書 并せて一時と爲すは誤りなり。

舊書に「元和四年十月、鄧王寧を立てて皇太子と爲し、大赦す」と。新書の太子を立てるは是の年の閏三月に在りて、



大赦は十月に在り。按ずるに綱目に「是の年の閏三月制して繫囚を降し、租税を蠲く」と。此れ即ち大赦なり。是の月又「鄧王寧を立てて皇太子と爲す」と書す。是れ太子を立てるは閏三月に在るは、新書と同じ。然からば綱目の赦は前に在りて、太子を立てるは後に在れば、太子を立てるに因りて赦すに非ざるなり。三書は俱に合せず。未だ孰れが是なるかを知らず。

李密書を唐公に致し、自ら盟主爲らんと欲し、唐公答書するに及び、偽りて相ひ推奉するの事、舊書敘ぶるは翟讓を殺すの後に在り、新書敘ぶるは翟讓を殺すの前に在り。按ずるに密讓を殺してより後、聲勢益々盛んなれば則ち書を高祖に致すは應に此の時に在るべし。然れども通鑑・綱目は俱に此の事を書して翟讓を殺すの前に在り。蓋し密興洛の倉を取りてより、讓密を推し魏公と稱せば、則ち己に羣雄中の巨擘爲り。而るに唐祖是の時方に兵を起さんとし、勝敗未だ知るべからず。故に密勢相ひ凌ぐを以て、自ら盟主爲らんとするの意有り。唐祖も亦た偽りて相ひ推奉し以て之を驕らしむ。密讓を殺す時に及ぶや、唐祖己に長安を取り、密豈に復た敢て勢相ひ凌ぐを以てせんや。綱目の書する所を閱れば、先後の次第自ら見ざる。舊書應に誤りとすべし。

舊書江夏王道宗傳に、「高麗を征する時、道宗李靖と同一先鋒と爲る」と。新書は則ち「李勣と同一先鋒と爲る」と云ふ。按ずるに靖傳に「遼を征する時、靖己に老ふ。太宗之を用ひんと欲すと雖も、其の老ふるを以て果たせず」と。而るに勣寔に行に在れば、則ち道宗の同にする所は李勣なり。李靖に非ざるなり。舊書は誤まる。

舊書魏元忠傳に「元忠周興に獄に陥され、市に詣りて將に刑せられんとするに、則天其の敬業を平ぐの功を以て、死を免し、貴州に配流す。方に刑に臨む時、則天先づ聲を傳へしめば、刑を監る者は遽かに之を釋かんと欲すも、元忠曰く、『未だ赦の虚實を知らざれば、豈に造次す可けんや』と。徐に宣赦を待ち、然る後に起謝す。尋いで詔にて還りて御史中丞と爲る。又來俊臣・侯思止の陥れる所と爲り、再び嶺南に流さる」と。新書は則ち此の刑を臨むに赦を傳ふ

事を以て來俊臣の陥れる所と爲ると謂ふ。而して俊臣の獄の前に、先に周興の陥れる所と爲り死に當たるに、揚・楚を平らぐの功を以て流さるるを得、俊臣の獄の後に、又侯思止の陥れる所と爲り、仍ち嶺南に眨めらる。是れ元忠は、凡て三たび流さる。周興の獄は一なり。來俊臣の獄は一なり。侯思止の獄は三なり。舊書は則ち僅かに周興の一次、俊臣・思止并せて一次と作して、凡て兩つながらに流さるるのみ。然れども舊書は又「前後三たび流され、則天問ひて『卿何を以て累りに謗を得らる』と曰ふ」と云はば、然らば則ち元忠・武后の時に在りて流るるは、凡て三たび。當に新書を以て是と爲すべし。

舊書、敬暉等張易之兄弟を誅せし時、薛季昶并せて武三思等を誅するを勸むも、暉と張柬之とは肯んぜず。三思・韋后に付き柄を得るに及び、柬之歎じて曰く、主上昔勇烈と稱さる。吾諸武を留むも、上自ら誅するを冀ふのみ、と。是れ諸武を誅せざるは暉及び柬之の誤りに由りするなり。新書、敬暉及び桓彥範傳は則ち、季昶勸めし時、暉も亦た苦諫するも彥範從はずと謂ふ。是れ暉も亦た諸武を誅さんと欲する者にして、其れ誤るは乃ち彥範に由りするなり。又た諸武を留め上自ら誅するを待つ語は彥範の言と爲す。今、通鑑を按ずるに、「二張の誅さるや、季昶・柬之・暉に謂ひて曰く、『二兇除かると雖も、産・祿猶ほ在り、草を去るも根を除かざれば、終に當に復た生ずべし』と。一人曰く、『大事已に定まり、彼猶ほ机上の肉なるのみ』と。是れ暉及び柬之皆な肯ては諸武を誅さんとせず、舊書と記す所同じ。其れ諸武を留め上の自ら誅するを待つ語は亦た以て柬之の言ふ所と爲す。然らば則ち當に舊書を以て是と爲すべし。舊書に「王同皎・武三思を誅せんことを謀るも、同謀の冉祖雍の告ぐる所と爲り、乃ち殺さる」と。新書は「宋之遜の兄之問、嘗て同謀の張仲の家に舍り其の事を知り、之遜の子曇をして密かに三思に告げしむ」と謂ふ。按ずるに、通鑑に「宋之問及び弟之遜は、乃ち密かに三思に告ぐ。遂に人をして同皎・武當の丞・周憬等と與に三思を殺さんことを謀り、皇后を廢さんことを告げしむ。皆坐して斬らる。之問・之遜並びに京官に除さる」と。此れに據らば、則ち同皎

を告ぐる者、之遜の兄弟より出ず。況んや冉祖雍本三思に黨し、五狗の列に在り。同皎豈に肯へて之と同謀せんや。當に新書を以て是と爲すべし。

舊書は「王<sup>+</sup>鉞の權盛なりし時、李林甫と雖も亦た之を畏る」と謂ひ、新書は「鉞<sup>+</sup>君を得と雖も、然れども林甫を畏れ、謹んで之に事ふ」と謂ふ。按ずるに舊書安祿山傳に「李<sup>+</sup>林甫相爲りしとき、朝臣敢へて抗禮するもの莫し。祿山來謁するも、甚しくは罄折せず。林甫鉞を召す。鉞至りて、趨拜すること甚だ謹なり。祿山乃ち悚息す」と。是れ鉞の林甫に事ふるは固より甚だ謹。舊書既に其の事を祿山傳に詳なるに、而るに鉞傳の反つて「林甫も亦た之を畏る」と云ふは、何ぞや。

舊書草見素傳は、祿山・國忠寵を争ひし時、見素是非する所無く、遂に凶逆犯順するに至るも、一言を措かず。新書見素傳は則ち、「祿山番將三十二人を以て漢將に代へるを請ふや、見素帝に力言し、『祿山の反狀甚だ明かなり』と謂ふ」と謂ふ。按ずるに綱目分注に、「是の時見素國忠に謂ひて曰く、『祿山の反狀明かなり』と。明日入見し、上迎へて謂ひて曰く、『卿等祿山を疑ふや』と。見素『反くに已に迹有り』と極言し、上悦ばず、竟に祿山の請に従ふ」とす。新書と同じ。當に新書を以て是と爲すべし。

舊書安祿山傳に、「楊國忠屢<sup>+</sup>祿山必ず反すと奏す。天寶十二載、上輔瑒琳に令して之を覘はしむに、其の厚き賂を得て還り、盛んに其の忠を稱す。國忠又云ふ、『召せば必ず至らず。』と。乃ち之を召す。十三載、華清宮に謁し、遂に以て左僕射と爲し、遣りて回らしむ。」と。新書は、「十三載、祿山來り華清宮に謁す。明年、國忠謀りて祿山に宰相を授けんとし、制未だ下らざるに、帝輔瑒琳をして大柑を賜ひ、因りて之を察せしむ。瑒琳厚き賂を得て還り、他無しと言へば、帝遂に召さず。」と。舊書に據れば則ち瑒琳の遣すること十二年に在り。新書に據れば則ち十四年に在り。今按るに、通鑑・綱目二書に、「十三載、祿山入朝す。帝加ふるに平章事を以てせんと欲すも、國忠祿山の目書を知らず

と謂へば、乃ち以て左僕射と爲す。十四載、國忠又祿山を平章事に除せんと請ひ、召して入朝せしめ、而して賈循等を以て祿山部する所を分領せしめんとす。上之に従ふ。已に制を草して發せざるに、更に璆琳を遣り之を覘はしむ。璆琳賂を得て還り、祿山に「一心無しと言ふ。上國忠に謂ひて曰く、『祿山は必ず異志無し。朕自ら之を保んず。卿憂ふる勿れ。』」と。乃ち止む。」と。正に新書と同じ。當に新書を以て是と爲すべし。

貞元三年、射生將韓欽緒等、妖僧李廣宏と謀反す。舊書本紀は「欽緒、游環の子を以て之を特赦す」と謂ひ、新書本紀は則ち「韓欽緒、誅に伏す」と云ふ。按ずるに舊書游環傳は「李廣宏謀反事發し、德宗、内官に命じて其の黨を捕へ、與に之を斬らしむ」と謂ひて、明らかに欽緒の或ひは殺され、或ひは赦さるるを言はず。新書游環傳に「欽緒、邠州に奔るも、中人捕へて斬る。狀を以て游環に示す。游環、懼れ、并せて欽緒の二子を執へ、京師に送る。帝之を赦す」と。既に「捕へて斬る。狀を以て游環に示す」と曰へば、則ち欽緒は已に斬らるること知る可きなり。況や游環、誅を懼れ、并せて欽緒の子を以て京師に送る。敢へて欽緒を匿さんや。通鑑に「欽緒、邠州に抵」し。械して京師に送る。軟奴「即ち廣宏。」等と與に皆腰斬せらる」と。是れ欽緒の誅に伏すは、通鑑、新書と皆同じ。舊書の謂ふ所の「之を赦す」とは、蓋し誤りにして、欽緒の子を赦すを以て、欽緒を赦すと爲すのみ。

魚朝恩の死。舊書は、「上朝恩の觀軍容使を罷めしめ、寒食に會し入宴し、有詔して之を留まらしむ。朝恩懼れ、言頗る逆なるも、上も亦た之を責めず。是の日、第に還り自經して死す」と。新書は則ち云ふ、「宴罷り、朝恩將に營に還らんとし、有詔して之を留まらしむ。帝其の異圖を責め、左右に命じ擒へ之を縊殺せしめ、外に知る者無し。明日、詔を下し、其の觀軍容使を罷めしむ。外人皆な『既に詔を奉じ乃ち自縊せりと云ふ』と言ふ」と。綱目の書する所亦た新書と合す。則ち舊書の所謂官を罷めて後自縊して死するは非なり。蓋し唐の時、國史本より之を諱み、舊書但だ其の舊に仍り、改訂するに暇あらざるのみ。

舊書第五琦傳に、「賀蘭進明 琦を遣り事を蜀中に奏せしめ、元宗大いに喜び、即ち命じて江淮租庸使と爲す。」と。新書の琦傳は、「肅宗 彭原に在り、琦事を奏じ訖へて即ち言ふ、『當今の急務は財用に在り。』と。帝乃ち令して江淮租庸使を勾當せしむ。」と謂ふ。舊書に據れば則ち元宗の命ずる所なり。新書に據れば則ち肅宗の命ずる所なり。按ずるに、通鑑に、「進明 參軍第五琦を遣りて蜀に入り事を奏せしむ。琦言ふ、『今兵を用ふに方りては財賦を急と爲す。財賦の産ずる所 江淮居多し。臣に一職を乞假せよ、軍をして乏用無からしむべし。』と。上皇悦び以て租庸使と爲す。」と。綱目に亦た此の事を書きて上皇使を遣り冊寶を以て位を肅宗に傳ふるの前に在れば、然ば則ち琦の租庸使と爲るは尙ほ是れ元宗の命ずる所なり。當に舊書を以て是と爲すべし。

新書李泌傳に、「德宗泌に謂ひて曰く、『人 盧杞は是れ姦邪と言ふ。朕殊に知らず。』と。泌曰く『此れ乃ち杞の姦邪爲る所以なり。』と。」と。舊書杞及び李勉傳は則ち俱に此の語を以て勉の言と爲して泌傳載せず。通鑑及び綱目を按ずるに、德宗 泌と即位以來の宰相を論じて「盧杞は忠清、強介の人。其の姦邪を言ふは、朕殊に覺えず。」と曰ひ、泌「此れ乃ち杞の姦邪爲る所以なり。尙し陛下之を覺ゆれば、豈に建中の亂有らんや。」と曰ふ。新書と同じ。舊書に李勉と謂ふは、應に誤なるべし。

舊書本紀に、「貞元元年正月、始めて顔真卿 李希烈の殺す所と爲るを聞し、司徒を追贈され、文忠と諡さる」と。新書本紀は則ち「貞元元年八月、李希烈 宣慰使顔真卿を殺す」と書す。舊書に據れば是の年正月已に眞卿害せらるるを聞せば、則ち害せられし時尚ほ前に在るなり。新書に據れば則ち是の年八月、始めて害せらるるなり。綱目を按ずるに、「興元元年八月、眞卿 希烈の殺す所と爲り、貞元元年正月、眞卿に司徒を贈り、文忠と諡す」と。是れ眞卿 興元元年八月に害せられ、諡を次年正月に贈らるるは、舊書と同じ。新書蓋し誤りて上年八月を以て、是の年八月と爲すのみならん。

舊書に、「武宗會昌元年九月、幽州軍亂し、其の節度使史元忠を逐ひ、牙將陳行泰を推し留後と爲す。八月、雄武軍使張絳、行泰慘虐にして帥と爲すべからずと奏し、本鎮軍を以て之を討たんと請へば、之を許し、遂に行泰を誅せば、詔して絳を以て兵馬使をせしめ、明年二月、令して留後の事を知せしめ、仍ほ名仲武を賜ふ。」と。是れ張仲武は即ち張絳なり。新書は則ち、「盧龍軍の將陳行泰、其の節度使史元忠を殺し、自ら留後を稱す。閏月、軍の將張絳、行泰を殺し、自ら留後を稱す。十月、軍亂れ絳を逐ひ、雄武軍使張仲武幽州に入る。」と云へば、則ち仲武と絳とは截然として兩人なり。按ずるに、藩鎮傳に、「行泰節度を邀め未だ報ぜざるに、次將張絳、行泰を殺し帥たるを求め、武宗自ら張仲武を用て之に代ふ。」と。又、通鑑に、「盧龍軍亂れ、節度使史元忠を殺し、陳行泰を推し留後の務を主らしめ、既にして復た亂れ、行泰を殺し張絳を立つ。會々雄武軍使張仲武、兵を起し絳を撃ち、且つ吏を遣りて表を奉ずれば、李德裕以て其の辭理較る順、許すべしと爲し、乃ち詔し仲武を以て留後と爲す。」と。是れ通鑑の紀す所と新書と合す。仲武と絳とは明かに係れ兩人。舊書に、絳は即ち名仲武を賜ふと謂ふ者は誤りなり。

舊書に「宣宗の大中四年、九月、幽州節度使周琳卒す。軍中、牙將張允伸を立てて留後と爲す」と。新書は則ち「盧龍軍亂し、其の節度使張直方を逐ひ、牙將張允伸自ら留後を稱し之を攻む」と。藩鎮傳も亦た「張仲武卒す。子の直方留後を襲ふも、其の下變を爲すを慮ひ、逃げて京師に奔る。軍中張允伸を推して留後と爲す」と。是れ允伸の前は、即ち直方にして所謂周琳なる者無し。然るに舊書張允伸傳に「大中四年、戎帥周琳寢疾し、允伸に表して留後と爲す」とあれば、則ち允伸の留後は之を周琳に得て、接するに直方よりするに非ざること、顯然として明白なり。又通鑑に「盧龍節度使周琳薨じ、軍中表して張允伸に留後と爲るを請ふ」と云へば、則ち舊書と相ひ合す。是れ允伸の前に周琳有り。新書の直方の後に允伸即ち留後と爲ると謂ふ者は誤りなり。

舊書鄭畋傳に、「畋、鳳翔に鎮し黃巢に抗ふも、たまたま病に臥せ、地賊衝に當たれば宜しく武將を用ふべきを以て、乃ち

李昌言を薦め自らの代として、身自ら行在に赴く」と。新書は則ち「敗軍府に在り、司馬李昌言之を襲ふ。敗、好語して曰く、『公能く兵を戦め人を愛し國の爲賊を滅さば則ち此に守するは可なり』と。乃ち軍を委ね去り、昌言自ら留後と爲る」と云ふ。是れ敗の去るは、寔に昌言之を逐へばなり。綱目分注も亦た、「昌言興平に在り、犒賞稍や薄きに因り、其の衆を激怒せしめ、軍を引き還り府城を襲ふ。敗、城に登り之に好語し、乃ち委ぬるに留務を以てし、即日西のかた行在に赴く」と云ふ。新書の記す所と同じ。舊書は誤りなり。

舊書の本紀に、「寶應元年冬、賊の范陽尹李懷仙史朝義の首を斬り、來り獻じ、降るを請ふ。」と。朝義傳に亦た云ふ、「朝義幽州に走り、賊帥李懷仙莫州に於いて生きながら之を擒し、送款來降し、梟首闕下に至る。」と。新書の本紀は則ち「史朝義自ら殺し、其の將李懷仙幽州を以て降る。」と云ひ、朝義傳も亦た「朝義先づ莫州に奔り、田承嗣給き、幽州に還り懷仙の兵を以て來り再び戦はしめんとし、朝義遂に出で、而して承嗣は即ち城を以て官軍に降る。朝義范陽に至り、懷仙の部將李抱忠納れず。兩番に奔るを謀るも、懷仙之を招き、幽州に至り自ら縊死す。懷仙其の首を斬り長安に傳ふ。」と云ふ。此れに據れば則ち朝義は先づ莫州に至り、後又、幽州に至り自ら縊死す。莫州に擒とせらるに非ざるなり。綱目は此の事を書き云ふ、「賊將田承嗣莫州を以て降り、李懷仙朝義を殺し、首を京師に傳ふ。」と。分注に亦た云ふ、「朝義屢々敗る。田承嗣説きて幽州に往き兵を起たしめんとす。朝義既に出づれば、承嗣は即ち降る。時に朝義の范陽節度使李懷仙已に降る。朝義至るも入るを得ず。乃ち東奔して契丹に入らんと欲し、懷仙兵を遣り之を追ふ。朝義乃ち自縊し、懷仙首を斬り以て獻ず。」と。記す所新書と小しく異なるも雖も、然れども其の幽州に至り自縊すと爲すは、則ち同じ。莫州に擒となるに非ざるなり。當に新書を以て據と爲すべし。

舊書楊復光傳に「黃巢江西を犯す。復光吳彥宏を遣はして諭して之を降らしむ。巢即ち尙君長をして表を奉じて國に歸せしむ。宋威其の功を害ひ之を撃つ。巢怒り復た亂る。朝廷尙君長を誅す」と。新書復光傳は則ち「宋威王仙芝

を撃つ。復光使を遣はして賊に降ることを約せしむ。仙芝尙長君を遣はして約の如くせしむも、威其の功を疾み密かに之を誅せんことを請ふ。故に仙芝怨みて復た叛す」と云ふ。黄巢傳も亦「復光吳彦宏を遣はして詔を以て賊を諭らしむ。仙芝蔡溫球・楚彥威・尙君長を遣はして來りて降らしむ。威陽りて之を許し、『君長と戦ひて之を擒にす』と上言し、乃ち君長を斬る。仙芝怒り、還りて洪州を攻む」と云ふ。舊書に據れば、則ち尙長君を遣はす者は黄巢なり、新書は則ち王仙芝なり。按ずるに綱目は「乾符四年冬、王仙芝尙長君を遣はし降ることを請はしむ。宋威執りて以て獻じ、之を斬る」と明書す。而も三年の冬の分注は「仙芝斬州を攻む。刺史裴渥奏官と爲るを許す。授くるに左神策軍押牙を以てす。仙芝の喜ぶこと甚だし。黄巢大いに怒り、『仙芝獨り官を取りて去らんとす。此の五千餘衆將をして安くんぞ歸らしめん』と謂ふ。仙芝遂に命を受けず、其の軍を分かちて、二千餘人をば仙芝及び君長に従はせ、二千餘人をば巢に従はし、各々道を分かちて去る」と謂ふ。是れ斬州の兵を分かちつの後、君長は常に仙芝に隨ふ。復た巢の所に在らざるなり。然らば則ち君長を遣はして降せしむる者は、乃ち仙芝にして巢に非ざるなり。當に新書を以て是と爲すべし。

新書沙陀傳に、「天復元年、李克用汴兵の敗る所と爲り、朱友寧長驅して太原を圍む。克用李嗣昭・周德威と雲中に奔ぐるを謀り、李存信は『北番に奔ぐるに如かず』と謂ふ。國昌の妻劉克用に語りて曰く、『王嘗て王行瑜の城を失ひ走げて死するを笑ふ。奈何して之に效ふや』と。克用悟り乃ち止む」と。此に據れば則ち克用に止まるを勧めし者は、國昌の妻なり。國昌は乃ち克用の父なり。其の妻なれば乃ち克用の母なり。然れども五代史唐家人傳に、「克用の正室劉夫人、明敏にして智略多し。存信北番に走入するを勧めし時に當り、夫人、『存信は牧羊兒、安んぞ成敗を計るに足るや。公常て王行瑜の邠州を棄て人の擒ふ所と爲るを笑ふ。今乃ち自ら此を爲すや』と曰ふ、と云はば則ち劉夫人は乃ち克用の妻なり。通鑑及び北夢瑣言も亦た「克用の妻劉夫人、克用に固守するを勸む」と謂ひ、其の下も又た「夫人に



子無く、姫の曹氏存勗を生む。夫人曹を待するに厚きを加ふ」と云ふ。是れ劉夫人の克用の妻爲るは明かなり。乃るに新書は以て國昌の妻と爲すは何に據るかを知らず。又た通鑑は、「是の時克用甚だ懼る。嗣昭・德威曰く、『兒輩此に在り、必ず能く固守せん』」と謂ひ、五代史嗣昭傳も亦た「存信雲州に奔ぐるを勸めるや、嗣昭争を爲して以て不可と爲す」と云ふ。是れ二人も亦た出奔の策を主とらざる者なり。而るに舊書の「二人と雲州に奔ぐるを謀る」と謂ふは、亦た誤りなり。

舊書朱瑄傳に、「汴の師來り攻む。瑄と妻と出奔し野人の爲めに害せられ、首を汴州に傳へ、妻は汴に至り尼と爲る。」と。新書に、「瑄出奔し、野人執へ以て獻じ、朱全忠之を斬り、而して其の妻を納る。」と。綱目分注に又謂ふ、「瑄城を棄て走り、野人執へ以て獻ず。其の弟朱瑾、時に兗州を守る。其の將康懷貞を留め城を守らしめ、自ら出でて糧を掠め以て軍に給す。全忠將を遣り兗州を襲ひ、瑾の妻子を獲はしめば、瑾淮南に奔る。全忠瑾の妻を納れ還る。張夫人之に見ゆを請ふ。瑾の妻拜し、夫人も亦た拜し、且つ泣きて曰く、『兗・鄆と司空とは約して兄弟と爲る。小故を以て兵を起し相攻め、吾が姒をして此に辱かしむ。他日汴州失守すれば吾も亦た吾が姒の今日の如きか。』」と。全忠乃ち瑾の妻を出だし、而して瑄を斬る。」と。五代史梁家人傳に、「太祖已に朱瑾を破り其の妻を納れ以て歸る。張后瑾の妻に見え云云。『綱目と同じ。』太祖乃ち瑾の妻を送り尼と爲し、后常に其の衣食を給ふ。」と。二書を合し以て觀れば、則ち全忠の納る所の者は、瑾の妻にして瑄の妻に非ざるなり。舊書に瑄の妻汴に至り尼と爲ると謂ひ、新書に全忠瑄を斬りて其の妻を納ると謂へば、則ち皆瑄の妻を謂ふなり。獨だ是れ五代史は本より歐公の作る所、唐書も亦た歐公總裁す。何を以て並びに參訂せざるか。又、五代史瑾傳を按ずるに、「瑾淮南に歸りて後、以て徐知訓を殺し族せらるに、妻陶氏刑に臨みて泣き、其の妾、『何爲れぞ泣くか。今行きて公に見えん。』」と曰へば、陶氏涙を收め欣然として戮に就く。」と。此れ蓋し江南に逃奔せし後、再娶の妻ならん「北夢瑄言も亦た以て瑾の妻と爲す。」。

【語注】

○皇泰二年……『資治通鑑綱目』卷三十八に「皇泰二年……八月唐鄴公薨」と有る。○舊書は武德……『舊唐書』卷一太祖本紀に、「秋七月、……中略……遣皇太子鎮蒲州以備突厥。丙申、突厥殺劉武周於白道」とある。○新書は武德……『新唐書』卷一高祖本紀に、「（武德五年）丙申、突厥殺劉武周於白道」とある。○按ずるに綱……『資治通鑑綱目』卷三十八、武德三年四月の條に、「夏四月、唐秦王世民擊宋金剛破之、定楊可汗武周及金剛、皆走死」とあり、その分注に、「劉武周聞金剛敗、大懼。棄并州走突厥。金剛欲復戰衆莫肯從、亦走突厥。世民入并州、武周所得州縣、皆入于唐。唐以唐儉爲并州道安撫大使、李仲文爲總管。未幾、金剛謀走上谷、突厥追獲腰斬之。武周之南寇也、其黨苑君璋諫曰、唐主舉一州之衆、直取長安、所向無敵。此乃天授、非人力也。不如北連突厥、南結唐朝。南面稱孤、足爲長策。武周不聽。及敗、泣謂君璋曰、不用公言、以至於此。久之、謀亡歸馬邑、事泄、突厥殺之」とある。○舊書は武德五年冬と在り……『舊唐書』卷一高祖本紀に、「冬十月癸酉、遣齊王元吉擊劉黑闥於洛州。時山東州縣多爲黑闥所守、所在殺長吏以應之。行軍總管、淮陽王道玄與黑闥戰于下博、道玄敗沒。十一月甲申、命皇太子率兵討劉黑闥。丙申、幸宜州、簡閱將士。十二月丙辰、校獵於華池。庚申、至自宜州。皇太子破劉黑闥於魏州、斬之、山東平」と有る。○新書には六……『新唐書』卷一高祖本紀に、「六年正月己卯、黑闥將葛德威執黑闥以降。壬午、嵩州人王摩娑反、驃騎將軍衛彥討之。庚寅、徐圓朗陷泗州。二月、劉黑闥伏誅。庚戌、幸溫湯。壬子、獵于驪山。甲寅、至自溫湯。丙寅、行軍總管李世勣敗徐圓朗執之」と有る。○綱目には……『資治通鑑綱目』卷三十八に、「淮陽王道玄與黑闥戰、敗沒」、「十一月、唐遣太子建成擊劉黑闥」、「唐太子建成兵至昌樂、劉黑闥亡走」、「春、正月、漢東將諸葛德威執其君黑闥降唐、唐斬之」と有る。○元和四年……『舊唐書』卷十四憲宗本紀上に「元和……三年……是歲、淮南・江南・江西・湖南・山南東道旱。夏四月……冬十

月：庚寅、冊鄧王寧爲皇太子」と有る。○新書の太子……『新唐書』卷七順宗本紀に「元和…四年…三月…閏月己酉、以早降京師死罪非殺人者、禁刺史境內樵率・諸道旨條外進獻・嶺南黔中福建掠良民爲奴婢者、省飛龍廐馬。己未、雨。丁卯、立鄧王寧爲皇太子。七月癸亥、吐蕃請和」と有る。○是の年の……『資治通鑑綱目』卷四十八に「憲宗皇帝元和…四年春正月南方旱饑遣使宣慰賑恤。鄭絪罷以李藩同平章事。三月以李鄲爲河東節度使。成德節度使王士真卒。閏月制降繫囚蠲租稅出宮人絕進奉禁掠賣。詔贖魏徵改第賜其家。以王士則爲神策大將軍。立鄧王寧爲皇太子」と有る。○舊書江夏王道宗傳に……『舊唐書』卷六十江夏王道宗傳に、「及大軍討高麗、令道宗與李勣爲前鋒、濟遼水、克蓋牟城」と有り、校勘記に「李勣、各本原作「李靖」、據冊府卷二九、新書卷七八江夏王道宗傳改。下同」と有る。○新書は……『新唐書』卷七十八江夏王道宗傳に、「乃詔與李勣爲前鋒、濟遼、拔蓋牟城」と有る。○靖傳に……『舊唐書』卷六十七李靖傳に、「太宗將伐遼東、召靖入閣、賜坐御前、謂曰、『公南平吳會、北清沙漠、西定慕容、唯東有高麗未服、公意如何』。對曰、『臣往者憑藉天威、薄展微效、今殘年朽骨、唯擬此行。陛下若不棄、老臣病期瘳矣』。太宗愍其羸老、不許」と有り、『新唐書』卷九十三李靖傳に、「帝將伐遼、召靖入、謂曰、『公南平吳會、北破突厥、西定吐谷渾、惟高麗未服、亦有意乎』。對曰、『往憑天威、得效尺寸功。今疾雖衰、陛下誠不棄、病且瘳矣』。帝憫其老、不許」と有る。○元忠周興に……『舊唐書』卷九十二魏元忠傳に「尋陷周興獄、詣市將刑、則天以元忠有討平敬業功、特免死配流貴州。時承救者將至市、先令傳呼、監刑者遽釋元忠令起、元忠曰、『未知赦虛實、豈可造次』。徐待宣敕、然始起謝、觀者咸歎其臨刑而神色不撓。聖歷元年、召授侍御史、擢拜御史中丞。又爲來俊臣侯思止所陷、再被流于嶺表。復還、授御史中丞。元忠前後三被流、於時人多稱其無罪。則天嘗謂曰『卿累負謗鑿、何也』。對曰、『臣猶鹿也、羅織之徒、有如獵者、苟須臣肉作羹耳。此輩殺臣以求達、臣復何辜。』と有る。○新書は則ち……『新唐書』卷百二十二魏元忠傳に「陷周興獄當死、以平揚楚功、得流。歲餘、爲御史中丞、復爲來俊臣所構。將就刑、神色不動、前死者宗室子三十餘、尸相枕藉於前、元忠顧

曰、『大丈夫行居此矣。』俄敕鳳閣舍人王隱客馳騎免死、傳警及于市、諸囚歡叫、元忠獨堅坐、左右命起、元忠曰、『未  
知實否。』既而隱客至、宣詔已、乃徐謝、亦不改容。流費州。復爲中丞。歲餘、陷侯思止獄、仍放嶺南。酷吏誅、人多  
訟元忠者、乃召復舊官。因侍宴、武后曰、『卿累負謗讒、何耶。』對曰、『臣猶鹿也、羅織之吏如獵者、苟須臣肉爲之羹  
耳、彼將殺臣以求進、臣顧何辜。』と有る。○卿何を以て……『歐北全集所收本は「卿累負謗讒何也」に作る。○舊書、  
敬暉等……『舊唐書』卷九十一 列傳四十一 敬暉傳に、「初、暉與彥範等誅張易之兄弟也、洛州長史薛季昶謂暉曰、二  
凶雖除、産・祿猶在。請因兵勢誅武三思之屬。匡正王室、以安天下。暉與張柬之屢陳不可、乃止。季昶歎曰、吾不知死  
所矣。翌日、三思因韋后之助、潛入宮中、內行相事、反易國政、爲天下所患。時議以此歸咎於暉。暉等既失政柄、受制  
於三思。暉每推床嗟惋、或彈指出血。柬之歎曰、主上疇昔爲英王時、素稱勇烈。吾留諸武、冀自誅鋤耳。今事勢已去、  
知復何道」とある。○新書、敬暉及び……『新唐書』卷一百二十 列傳第四十五 五王 敬暉傳に、「初、易之已誅、薛季  
昶請收諸武、暉亦苦諫、不從。三思濁亂、暉每椎坐悵恨、彈指流血」とあり、同上 桓彥範傳に「誅二張也、柬之勒兵  
景運門、將遂夷諸武。洛州長史薛季昶勸曰、二兇雖誅、彥・祿猶在、請除之。會日暮事遽、彥範不欲廣殺、囚曰、三思  
機上肉爾。留爲天子藉手。委昶嘆曰、吾無死所矣。俄而三思竊入宮、因韋后反盜朝權。同功者嘆曰、死我者、桓君也。  
彥範亦曰、主上昔爲英王、故吾留武氏使自誅定。今大事已去、得非天乎」とある。○今通鑑を按……『資治通鑑』卷二  
百八 神龍元年二月の條に、「二張之誅也、洛州長史薛季昶謂張柬之敬暉曰、『二凶雖除、産祿猶在。去草不去根、終當  
復生。』二人曰、『大事已定。彼猶几上肉耳。夫何能爲。所誅已多、不可復益也』」とあり、その下文に、「柬之等或撫床  
歎憤、或彈指出血、曰、『主上昔爲英王、時稱勇烈。吾所以不誅諸武者、欲使上自誅之、以張天子之威耳。今反如此。  
事勢已去、知復奈何』」とある。○舊書に……『舊唐書』卷一百八十七 上 王同皎傳に、「同謀人撫州司倉冉祖雍、具以  
其計密告三思」と有る。○新書は……『新唐書』卷一百九十一 王同皎傳に、「之遜兄之問嘗舍仲之家、亦得其謀。令曇

密語三思」と有る。○通鑑に……『資治通鑑』卷第二百八に、「之遜於簾下聞之、密遣其子曇及甥校書郎李俊告三思、欲以自贖。三思使曇・俊及撫州司倉冉祖雍、上書告同皎與洛陽人張仲之・祖延慶・武當丞壽春周憬等、潛結壯士、謀殺三思、因勒兵詣闕、廢皇后。〔同皎等皆坐斬〕之問・之遜・曇・俊・祖雍並除京官、加朝散大夫」と有る。○王鉞の權……『舊唐書』卷百五王鉞傳に「鉞威權轉盛、兼二十餘使、近宅爲使院、文案堆積、胥吏求押一字、卽累日不遂。中使賜遺、不絕於門、雖晉公林甫亦畏避之」と有る。○鉞君を得……『新唐書』卷百三十四王鉞傳に「天寶八載、方士李渾上言見太白老人告玉版祕記事、帝詔鉞按其地求得之、因是羣臣奉上帝號。明年、鉞爲御史大夫、兼京兆尹、加知總監、裁接使。於是領二十餘使、中外畏其權。鉞於第左建大院、文書叢委、吏爭入求署一字、累數日不得者。天子使者賜遺相望、聲焰薰灼。帝寵任鉞亞林甫、而楊國忠不如也。然鉞畏林甫、謹事之。安祿山怙寵、見林甫白事、稍自怠、林甫欲示之威、託以事召王大夫、俄而鉞至、趨進俯伏、祿山不覺自失、鉞語久、祿山益恭。故林甫雖忌其盛、亦以附己親之」と有る。○李林甫相……『舊唐書』卷二百四上安祿山傳に「六載、加大夫。常令劉駱谷奏事。與王鉞俱爲大夫。李林甫爲相、朝臣莫敢抗禮、祿山承恩深、入謁不甚聲折。林甫命王鉞、鉞趨拜謹甚、祿山悚息、腰漸曲。每與語、皆揣知其情而先言之、祿山以爲神明、每見林甫、雖盛冬亦汗洽。林甫接以溫言、中書廳引坐、以己披袍覆之、祿山欣荷。無所隱、呼爲十郎。駱谷奏事、先問『十郎何言。』有好言則喜躍、若但言『大夫須好檢校』、則反手據牀曰、『阿與、我死也。』李龜年嘗數其說、玄宗以爲笑樂」と有る。○舊書韋見素……『舊唐書』卷一百零八韋見素傳に、「時祿山與國忠爭寵、兩相猜嫌、見素亦無所是非、署字而已。遂至兇胡犯順、不措一言」とある。○新書見素傳……『新唐書』卷一百八十八列傳四十三韋見素傳に、「明年、祿山表請蕃將三十二人代漢將。帝許之。見素不悅、謂國忠曰、祿山反狀暴天下。今又以蕃代漢。難將作矣。國忠不應見素曰、知禍之芽、不能防。見禍之形、不能制。焉用彼相。明日、當懇論之、既入帝迎諭曰、卿等有疑祿山意耶。國忠見素趨下流涕且陳祿山反明甚」とある。○按ずるに……『資治通鑑綱目』卷四十四上に、

「十四載春一月、安祿山請以蕃將代漢將。從之」の條があり、その分注に「祿山使副將何千年入奏、請以蕃將三十二人代漢將。韋見素謂楊國忠曰、祿山久有異志。今又有此請。其反明矣。明日、入見上迎謂曰、卿等疑祿山耶。見素因極言祿山反已有迹。所請不可許。上不悅。竟從祿山之請」とある。○楊國忠屢々……『舊唐書』卷二百上、列傳第一百五十五上、安祿山傳に「楊國忠屢奏祿山必反。十二載、玄宗使中官輔瑒琳覘之、得其賄賂、盛言其忠。國忠又云『召必不至。』洎召之而至。十三載正月、謁於華清宮。因涕泣言『臣蕃人。不識字、陛下擢臣不次、被楊國忠欲得殺臣。』玄宗益親厚之、遂以爲左僕射、却迴。」と有る。○十三載祿山……『新唐書』卷二百二十五上、列傳第一百五十五上、逆臣傳上、安祿山傳に、「十三載、來謁華清宮、對帝泣曰『臣蕃人。不識文字、陛下擢以不次、國忠必欲殺臣以甘心。』帝慰解之。拜尙書左僕射、賜實封千戶、奴婢第產稱是、詔還鎮。……明年、國忠謀授祿山同中書門下平章事、召還朝。制未下、帝使中官輔瑒琳賜大柑、因察非常。祿山厚賂之、還言無它。帝遂不召。」と有る。○通鑑綱目二……『資治通鑑』卷二百十七、唐紀三十三に「十三載春正月己亥、安祿山入朝。是時、楊國忠言祿山必反。且曰、陛下試召之、必不來。上使召之。祿山聞命即至。庚子、見上於華清宮。泣曰、臣本胡人。陛下寵擢至此、爲國忠所疾、臣死無日矣。上憐之、賞賜巨萬。由是益親信祿山、國忠之言不能入矣。太子亦知祿山必反言於上、上不聽。……上欲加安祿山同平章事。已令張洎草制、楊國忠諫曰『祿山雖有軍功、目不知書。豈可爲宰相。制書若下、恐四夷輕唐。』上乃止。乙巳、加祿山左僕射。……十四載……二月辛亥、安祿山使副將何千年入奏、請以蕃將三十二人代漢將。上命立進書、給告身。韋見素謂楊國忠曰『祿山久有異志、今又有此請。其反明矣。明日、見素當極言。上未允、公其繼之。』國忠許諾。壬子、國忠・見素入見、上迎謂曰『卿等有疑祿山之意邪。』見素因極言祿山反已有迹、所請不可許。上不悅。國忠遂巡不敢言。上竟從祿山之請。它日、國忠・見素言於上曰『臣有策可坐消祿山之謀。今若除祿山平章事、召詣闕、以賈循爲范陽節度使、呂知誨爲平盧節度使、楊光翽爲河東節度使、則勢自分矣。』上從之。已草制、上留不發。更遣中使輔瑒琳以珍果賜祿山、潛察其變。

瑯琊受祿山厚賂、還盛言祿山竭忠奉國、無有二心。上謂國忠等曰『祿山、朕推心待之、必無異志。東北二虜、藉其鎮遏。朕自保之、卿等勿憂也。』事遂寢。」と有り、『資治通鑑綱目』卷四十四にも略同文が見られる。○欽緒遊瓊の……『舊唐書』卷十二德宗本紀上に「貞元……三年……冬十月、吐蕃修原州城、屯據之。丁亥、太子太傅李叔明卒。丙戌、神策將魏循上言『射生將韓欽緒等十餘人與資敬寺妖僧李廣弘同謀不軌、廣弘自言當爲人主、約十月十日大舉、已署置將相名目』。詔捕劾之、連坐死者百餘人。欽緒、遊瓊之子、特赦之。是月、復降魚書停刺史務」と有る。○韓欽緒誅に……『新唐書』卷七德宗本紀に「貞元……三年……十月甲申、寇豐義、韓游瓊敗之。乙酉、寇長武城、城使韓全義敗之。壬辰、射生將韓欽緒謀反、伏誅。」と有る。○李廣弘謀反に……『舊唐書』卷百五十韓游瓊傳に「三年、以子欽緒與妖賊李廣弘同謀不軌、時遊瓊鎮長武城、事將發、欽緒奔于邠州、邠州將史械送京師。遊瓊以子大逆、請代歸、固欲詣闕、詔不許。遊瓊鎖繫欽緒二子送京師、請從坐、上宥之」と有る。○之を赦す……『新唐書』卷一百五十六韓游瓊傳に「會子欽緒以射生將衛京師、與妖人李廣弘謀反、謀泄、奔邠州、中人捕斬、以狀示游瓊。游瓊懼、求歸死京師、帝不許。又執欽緒二息送京師、帝亦原之。未幾入朝、素服聽命、有詔復位、勞遇如故」と有る。○通鑑に……『資治通鑑』卷二百三十三唐紀四十九に「欽緒、遊瓊之子也、亡抵邠州。遊瓊出屯長武城留後械送京師。壬辰、腰斬軟奴等八人、北軍之士坐死者八百餘人、而朝廷之臣無連及者。韓遊瓊委軍詣闕謝、上遣使止之、委任如初。遊瓊又械送欽緒二子。上宥之」と有る。○舊書は上朝……『舊唐書』卷百八十四宦官傳 魚朝恩の傳に、「詔罷朝恩觀軍容使、加實封通前一千戶。朝恩始疑、然每朝謁、恩顧如常。亦不以載爲意。會寒食宴近臣、朝恩入謁。先是、每宴罷、必出還營。是日、有詔留之。朝恩始懼、言頗悖慢、上亦以舊恩不之責。是日、朝恩還第、自經而卒」とある。○新書は則ち……『新唐書』卷二百零七列傳第一百四十二宦者上の魚朝恩傳に、「方寒食、宴禁中、旣罷將還營、有詔留議事。朝恩素肥、每乘小車入宮省。帝聞車聲危坐、(元)載守中書省。朝恩至、帝責其異圖。朝恩自辯悖傲、(周)皓與左右禽縊之。死年四十九。外無知者、帝隱之。

下詔罷觀軍容等使、增實封戶六百、內侍監如故。外鹹言、既奉詔乃投縊云」とある。○綱目の書す：「資治通鑑綱目」卷四十五下の「五年春三月、魚朝恩伏誅」とあり、その分注に「上以寒食宴貴近於禁中、(元)載守中書省。宴罷、朝恩將出、上責其異圖、皓與左右縊殺之」とある。○賀蘭進明琦：「舊唐書」卷百二十三、列傳第七十三、五琦傳に「天寶初、事韋堅、堅敗貶官。累至須江丞、時太守賀蘭進明甚重之。會安祿山反、進明遷北海郡太守、奏、琦爲錄事參軍。祿山已陷河間・信都等五郡。進明未有戰功、玄宗大怒、遣中使封刀促之曰『收地不得、卽斬進明之首。』進明惶懼、莫知所出。琦乃勸令厚以財帛募勇敢士、出奇力戰、遂收所陷之郡。令琦奏事、至蜀中。琦得謁見、奏言『方今之急在兵、兵之強弱在賦。賦之所出、江淮居多。若假臣職任、使濟軍須、臣能使賞給之資、不勞聖慮。』玄宗大喜、卽日拜監察御史、勾當江淮租庸使。」と有る。○肅宗彭原に：「新唐書」卷一百四十九、列傳第七十四、第五琦傳に、「天寶中、事韋堅。堅敗不得調。久之、爲須江丞。太守賀蘭進明才之。安祿山反、進明徙北海、奏琦爲錄事參軍事。時、賊已陷河間・信都、進明未戰。玄宗怒、遣使封刀趣之曰『不亟進兵。卽斬首。』進明懼、不知所出。琦勸厚以財募勇士、出賊不意。如其計、復收所陷郡。肅宗駐彭原、進明遣琦奏事。既謁見卽陳『今之急在兵。兵彊弱在賦。賦所出以江淮爲淵。若假臣一職、請悉東南寶貨、飛餉函・洛。惟陛下命。』帝悅。拜監察御史・勾當江淮租庸使。」と有る。○進明參軍第：「資治通鑑」卷二百十八、唐紀三十四に「(至德元載八月)癸未、上皇下制赦天下。北海太守賀蘭進明遣錄事參軍第五琦入蜀奏事。琦言於上皇『以爲、今方用兵、財賦爲急。財賦所產、江淮居多。乞、假臣一職、可使軍無乏用。』上皇悅、卽以琦爲監察御史・江淮租庸使。」と有る。○上皇使を遣：「資治通鑑綱目」卷四十四、天寶十五載八月。○新書李泌傳：「新唐書」卷一百三十九、列傳第六十四、李泌傳に、「帝嘗從容言、『盧杞清介敢言、然少學、不能廣朕以古道。人皆指其姦而朕不覺也。』」對曰、『陛下能覺杞之惡、安致建中禍邪。李揆和蕃、顏真卿使希烈、其害舊德多矣。又楊炎罪不至死、杞擠陷之而相關播。懷光立功、逼使其叛。此欺天也。』」と有り、李泌の發言が趙氏引く所と少し異なる。○舊



書紀及び……『舊唐書』卷一百三十五、列傳第八十五、盧杞傳に、「上謂宰相曰、『朕欲授杞一小州刺史、可乎。』李勉對曰、『陛下授杞大郡亦可、其如兆庶失望何。』上曰、『衆人論杞奸邪、朕何不知。』勉曰、『盧杞奸邪、天下人皆知。唯陛下不知、此所以爲奸邪也。』德宗默然良久。散騎常侍李泌復對。上曰、『盧杞之事、朕已可袁高所奏、如何。』泌拜而言曰、『累日外人竊議、以陛下同漢之桓・靈。臣今親承聖旨、乃知堯・舜之不迨也。』德宗大悅、慰勉之。杞尋卒於澧州。」と有り、同卷一百三十一、列傳第八十一、李勉傳に、「上謂勉曰、『衆人皆言盧杞姦邪、朕何不知。卿知其狀乎。』對曰、『天下皆知其姦邪、獨陛下不知、所以爲姦邪也。』時人多其正直、然自是見疏。」と有る。○通鑑及び綱……『資治通鑑』卷第二百三十三、唐紀四十九、貞元四年に、「泌自陳衰老、獨任宰相、精力耗竭、既未聽其去、乞更除一相。上曰、『朕深知卿勞苦、但未得其人耳。』上從容與泌論卽位以來幸相曰、『盧杞忠清強介、人言杞姦邪、朕殊不覺其然。』泌曰、『人言杞姦邪、而陛下獨不覺其姦邪、此乃杞之所以爲姦邪也。儼陛下覺之、豈有建中之亂乎。杞以私隙殺楊炎、擠顏真卿於死地、激李懷光使叛、賴陛下聖明竄逐之、人心頓喜、天亦悔禍。不然、亂何由弭。』と有り、『資治通鑑綱目』卷四十七に略同文有り。○舊書本紀貞……『舊唐書』卷十二 德宗上に、「貞元元年正月丁酉朔、御含元殿受朝賀、禮畢、宣制大赦天下、改元貞元。……(中略)……癸酉、始聞太子太師・魯郡公顏真卿爲希烈所害。追贈司徒、廢朝五日、諡曰文忠。乃特授男額・碩等官」とある。○新書本紀は……『新唐書』卷七 德宗本紀に、「貞元元年正月丁酉、大赦、改元、罷權稅。……(中略)……八月、……(中略)……丙戌、李希烈殺宣慰使顏真卿」とある。○綱目を按ず……『資治通鑑綱目』卷四十七上の興元元年の條に、「八月、顏真卿爲李希烈所殺」とあり、同上の貞元元年の條に、「貞元元年春正月、贈顏真卿司徒、諡文忠」とある。○武宗會昌元年……『舊唐書』卷十八上、武宗本紀上に「會昌元年……九月、幽州軍亂、逐其帥史元忠、推牙將陳行泰爲留後。三軍上章請符節、朝旨未許。十月、幽州雄武軍使張絳遣軍吏吳仲舒入朝、言行泰慘虐、不可處將帥之任、請以鎮軍加討。許之。十月、誅行泰、遂以絳知兵馬使。……二年春正月丙申朔、以撫王紘爲開府儀同

三司・幽州大都督府長史、充幽州盧龍節度大使。以雄武軍使張絳檢校左散騎常侍、兼幽州左司馬、知兩使留後、仍賜名仲武。」と有り、月數の不合が見られる。『陔餘叢考』の「八月」は據る所未詳。舊唐書の「九月」が「閏（九）月」の誤りであることは、『資治通鑑』（後引）胡氏注所引「考異」及び『舊唐書校勘記』卷九を参照。また、張仲武・張絳「兩人を以て一人と爲す」誤りについては、既に『考異』が指摘し、『校勘記』もこれを引く。また、『陔餘叢考』の「二月」も據る所未詳。○盧龍軍の將：『新唐書』卷八、武宗本紀に「九月癸巳、幽州盧龍軍將陳行泰殺其節度使史元忠、自稱知留務。閏月、幽州盧龍軍將張絳殺行泰、自稱主軍務。十月、幽州盧龍軍逐絳、雄武軍使張仲武入于幽州。」と有る。○行泰節度を：『新唐書』卷二百一十一、列傳第一百三十七、藩鎮盧龍、李載義傳併傳史元忠傳に、「會昌初、爲偏將陳行泰所殺。行泰邀節制、未報、次將張絳殺行泰、起求帥軍。武宗自用張仲武代之。」と有る。○盧龍軍亂れ：『資治通鑑』卷二百四十六、唐紀六十二に「（會昌元年九月）癸巳、盧龍軍亂、殺節度使史元忠、推陳行泰主留務。……閏月……盧龍軍復亂、殺陳行泰立牙將張絳。初陳行泰逐史元忠遣監軍廉、以軍中大將表來求節制。李德裕曰『河朔事勢、臣所熟諳。比來朝廷遣使賜詔常太速、故軍情遂固。若置之數月不問、必自生變。今請、留監軍廉勿遣使、以觀之。』既而軍中果殺行泰、立張絳、復求節制。朝廷亦不問。會雄武軍使張仲武起兵擊絳、且遣軍吏吳仲舒奉表詣京師、稱絳慘虐、請以本軍討之。冬十月、仲舒至京師。詔宰相問狀。仲舒言『行泰・絳皆遊客。故人心不附。仲武幽州舊將、性忠義、通書、習戎事、人心嚮之。曩者張絳初殺行泰、召仲武欲以留務讓之。牙中一二百人不可。仲武行至昌平、絳復卻之。今計仲武纔發雄武・軍中已逐絳矣。』李德裕問『雄武士卒幾何。』對曰『軍士八百。外有土團五百人。』德裕曰『兵少。何以立功。』對曰『在得人心。苟人心不從、兵三萬何益。』德裕又問『萬一不克如何。』對曰『幽州糧食皆在媯州及北邊七鎮。萬一未能入、則據居庸關絕其糧道、幽州自困矣。』德裕奏『行泰・絳皆使大將上表、脅朝廷、邀節制、故不可與。今、仲武先自發兵、爲朝廷討亂。與之則似有名。』乃以仲武知盧龍留後。仲武尋克幽州。」と有る。なお、

『新唐書』卷二百一十二、列傳第一百三十七、藩鎮盧龍、張仲武傳に、「張仲武、范陽人。通左氏春秋。會昌初、爲雄武軍使。行泰殺元忠、宰相李德裕計、河朔請帥、皆報下太速、故軍得以安、若少須下、且有變。帝許之。未報、果爲絳所殺。復誘其軍以請、亦置未報。是時、回鶻爲黠戛斯所破、烏介可汗託天德塞上。而仲武遣其屬吳仲舒入朝、請以本軍擊回鶻。德裕因問北方事、仲舒曰『行泰・絳皆遊客、人心不附。仲武、舊將張光朝子、年五十餘。通書、習戎事、性忠義。願歸款朝廷舊矣。』德裕曰『即以爲帥、軍得無復亂乎。』答曰『仲武得土心、受命必有逐絳者。』德裕入白帝曰『行泰等邀節不可許。仲武求自效、用之有名。軍且無辭。』乃擢兵馬留後、而詔撫王領節度。詔下、絳果爲軍中所逐。即拜仲武副大使・檢校工部尚書・蘭陵郡公。」と有り、張仲武の上奏の當初の目的が回鶻征伐であつたとするが、『舊唐書』卷百八十、列傳第三百三十の本傳は「行泰又爲次將張絳所殺、令三軍上表、請降符節。時、仲武遣軍吏吳仲舒表請以本軍伐叛。」と、『通鑑』同様に張絳への征伐とする。○大中四年、九月：―『舊唐書』卷十八下本紀に「(大中四年)九月、以朝請大夫・檢校禮部尚書・孟州刺史・河陽三城節度使李拭爲太原尹・北都留守・河東節度等使。幽州節度使周琳卒、軍人立其牙將張允伸爲留後。」と有る。○盧龍軍亂し：―『新唐書』卷八玄宗本紀に「八月、幽州盧龍軍亂、逐其節度使張直方、衙將張允伸自稱留後。」と有る。○張仲武卒：―『新唐書』卷二百一十二盧龍傳に「子直方、以右金吾將軍襲節度留後、俄進副大使。舉動多不法、畏下變起、乃託出敗奔京師。軍中以張允伸總後務。直方至、宣宗遣使者郊勞、授金吾大將軍、以其族大、給檢校工部尚書俸。久之、進檢校尚書右僕射。」と有る。○大中四年：―『舊唐書』卷一百八十張允伸傳に「大中四年、戎帥周琳瘵疾、表允伸爲留後、朝廷可其奏、加右散騎常侍。其年冬、詔賜旌節、遷檢校工部尚書。咸通九年、累加至光祿大夫・檢校司徒・兼太傅・同中書門下平章事・燕國公。十年、徐人作亂、請以弟允、領兵伐叛、懿宗不允。進助軍米五十萬石、鹽二萬石、詔嘉之、賜以錦綵・玉帶・金銀器等」と有る。○盧龍節度使：―『資治通鑑』卷二四九唐紀六十五「大中四年：盧龍節度使周琳薨、軍中表請以押牙兼馬步都知兵馬使張允伸爲留後」と有る。○舊書

鄭啟傳……『舊唐書』卷一百七十八列傳一百二十八鄭啟傳に、「其年冬、啟暴病。以岐山方禦賊冲、宜須驍將鎮守、表薦大將李昌言。詔可之。詔啟赴行在」とある。○新書は則ち……『新唐書』卷一百八十五列傳第一百十鄭啟傳に、「行軍司馬李昌言者屯興平。遣麾下求爲南面都統、輒引兵趨府、啟不意見襲。登城好語曰、吾方入朝。公能戰兵愛人、爲國滅賊乎。能則守此矣。遂委軍去。昌言自爲留後、衛啟出境」とある。○綱目分注も……『資治通鑑綱目』卷五十一中和二年十月の條に、「冬十月、鳳翔行軍司馬李昌言作亂、鄭啟赴行在」とあり、その分注に「李昌言將兵屯興平。時鳳翔倉庫虛竭、犒賞稍薄。昌言因激怒其衆、引兵還襲府城。鄭啟登城謂之曰、行軍苟能戰兵愛人爲國滅賊、亦可以順守矣。乃以留務委之。即日、西赴行在」とある。○寶應元年冬……『舊唐書』卷十一、代宗本紀に「寶應元年……冬十月辛酉、詔天下兵馬元帥雍王統河東・朔方及諸道行營・迴紇等兵十餘萬討史朝義會軍於陳州。……甲戌、戰于橫水。賊大敗、俘斬六萬計。史朝義奔冀州。……丁酉、僞恆州節度使張忠志以趙・定・深・恆・易五州歸順。以忠志檢校禮部尚書・恆州刺史、充成德軍節度使、賜姓名曰李寶臣。於是河北州郡悉平。賊范陽尹李懷仙斬史朝義首、來獻、請降。」と有り、同卷二百上、列傳百五十上、史朝義傳に「寶應元年十月、遣元帥雍王領河東朔方諸節度・迴紇兵馬赴陝。……二十九日、與朝義戰于邙山之下。逆賊敗績、走渡河。斬首萬六千、生擒四千六百、降三萬二千人。器械不可勝數。朝義走投汴州、汴州僞將張獻誠拒之。乃渡河北投幽州。二年正月、賊僞范陽節度李懷仙於莫州生擒之、送款來降。梟首至闕下。」と有る。なお、同卷百四十三、列傳九十三、李懷仙傳にも「朝義以餘孽數千奔范陽、懷仙誘而擒之、斬首來獻。」と有る。○史朝義自ら……『新唐書』卷六、代宗本紀に「廣德元年正月……甲申、史朝義自殺。其將李懷仙以幽州降、田承嗣以魏州降。」と有り（寶應二年七月に廣德と改元）、同卷二百二十五上、逆臣傳上、史朝義傳に「明年正月、閔精兵、欲決死。承嗣謂朝義『不如身將驍銳還幽州、因懷仙悉兵五萬還戰、聲勢外張、勝可萬全。臣請堅守、雖瑒之彊、不遽下。』朝義然納、以騎五千夜出。比行、握承嗣手、以存亡爲託、承嗣頓首流涕。將行復曰『闔門百口母老子稚、今付公矣。』

承嗣聽命。少選、集諸將曰『吾與公等事燕、下河北百五十餘城、發人冢墓、焚人室廬、掠人玉帛、壯者死鋒刃、弱者填溝壑、公門華胄、爲我廝隸、齊姜・宋子、爲我掃除。今、天降鑿、吾等安所歸命。自古禍福亦不常、能改往脩今。是轉危卽安矣。旦日且出降、公等謂何。』衆咸曰『善。』遂明、使人號城上曰『朝義夜半走矣。胡不追賊。』塲未信、承嗣將朝義母及妻孺詣塲壘、於是諸軍率輕兵追之。朝義至范陽。懷仙部將李抱忠閉壁不受曰『頃旣受命天子、一年之中且降且叛、二三孰甚焉。』朝義告飢。抱忠饋于野。朝義飯、軍亦飯。飯已、軍子弟稍稍辭去。朝義流涕罵承嗣曰『老奴誤我。』去至梁鄉、拜思明墓。東走廣陽、不受。謀奔兩蕃、懷仙招之。自漁陽回止幽州、縊死醫巫閭河下。懷仙斬其首傳長安、召故將收其屍。懷仙改服出次哭之、士皆號慟。及葬、莫知其所。」と有る。○賊將田承嗣：『資治通鑑綱目』卷四十五の綱に「賊將田承嗣以莫州降、李懷仙殺朝義、傳首京師。」と有り、目に「史朝義屢出戰皆敗。田承嗣說史朝義令往幽州發兵、朝義從之。承嗣卽以城降。時、朝義范陽節度使李懷仙已請降。朝義至、不得入。獨與胡騎數百東奔、欲入奚・契丹。懷仙遣兵追及之。朝義窮蹙、縊於林中。懷仙取其首以獻。」と有る。『資治通鑑』卷二百二十一、唐紀三十八も大略同じ。○黃巢 江西：『舊唐書』卷一三四楊復光傳に「乾符中、賊渠黃巢之犯江西、復光爲排陣使、遣判官吳彥弘入城喻朝旨、巢卽令其將尚君長奉表歸國。招討使宋威害其功、併兵擊賊、巢怒、復作剽。朝廷誅尚君長、怨愈深」と有る。○宋威 王仙芝：『新唐書』卷二百七楊復光傳に「招討使宋威擊仙芝於江西、復光在軍、請判官吳彥宏約賊絳、仙芝遣將尚君長自縛如約。威疾其功、密請僖宗誅之、故仙芝怨、復引兵叛。」と有る。○復光 吳彥宏：『新唐書』卷二二五下黃巢傳に「帝詔崔安潛歸忠武、復起宋威、曾元裕、以招討使還之、而楊復光監軍。復光遣其屬吳彥宏以詔諭賊、仙芝乃遣蔡溫球・楚彥威・尚君長來降、欲詣闕請罪、又遣威書求節度。威陽許之、上言『與君長戰、禽之。復光固言其降。命侍御史與中人馳驛卽訊、不能明。卒斬君長等于狗脊嶺。仙芝怒、還攻洪州、入其郛。威自將往救、敗仙芝於黃梅、斬賊五萬級、獲仙芝、傳首京師」と有る。○新書沙陀傳：『新唐書』卷二百一十八列傳第一百四十三沙陀傳に、

「克用率兵趨平陽、攻吉上堡、破汴軍於晉州。李嗣昭・周德威下慈・隰、進屯河中。汴將朱友寧以兵十萬壁其南、全忠自屯晉州。晉人聞全忠至、皆失色。時有虹貫德威營。氏叔琮薄壘疾門、晉兵大敗、仗械輜儲皆盡。友寧長驅略汾・慈・隰州皆下、遂圍太原、攻西門。德威・嗣昭循山掣餘衆得歸。克用大恐、身荷版築、率士拒守、陰於嗣昭・德威謀奔雲州。李存信曰、不如依北蕃。國昌妻劉語克用曰、聞王欲委城入蕃。審乎。計誰出。曰、存信等爲此。劉曰、彼牧羊奴。安辦遠計。王常笑王行瑜失城走而死。若何效之。且王頃居達靺、危不免。必一朝去此、禍不旋踵、渠能及北虜哉。克用悟、乃止」とある。○五代史唐家人傳第二に、「太祖正室劉氏、代北人也。其次妃曹氏、太原人也。太祖封晉王、劉氏封秦國夫人。自太祖起兵代北、劉氏常從征伐。爲人明敏多智略、頗習兵機、常教其侍妾騎射、以佐太祖。其後、太祖擊劉仁恭敗歸。梁遣氏叔琮・康懷英等連歲攻晉圍太原、晉兵屢敗、太祖憂窘、不知所爲。大將李存信等勸太祖亡入北邊、收兵以圖再舉。太祖然之。入以語夫人。夫人問誰爲此謀者曰、存信也。夫人罵曰、存信代北牧羊兒耳。安足與計成敗邪。且公嘗笑王行瑜棄邠州走、卒爲人擒。今乃自爲此乎。昔公亡在達靺、幾不能自脫、賴天下多故、乃得南歸。今屢敗之兵、散亡無幾。一失其守、誰肯從公。北邊其可至乎。太祖大悟而止」とある。○通鑑及北史『資治通鑑』卷二百六十三天復二年三月の條に、「李存信曰、關・河北皆受制於朱溫。我兵寡地蹙、守此孤城、彼築壘穿塹環之、以積久制我。我飛走無路、坐待困斃耳。今事勢已急。不若且入北虜徐圖進取。嗣昭力爭之、克用不能決。劉夫人言於克用曰、存信北川牧羊兒耳。安知遠慮。王常笑王行瑜輕去其城死於人手、今日反效之邪。且王昔居達靺、幾不自免。賴朝廷多事、乃得復歸。今一足出城、則禍變不測、塞外可得至邪。克用乃止」とある。『北夢瑣言』卷十七晉王上源驛遇難に、「晉王李克用妻劉夫人、常隨軍行、至於軍機、多所弘益。先是、汴州上源驛之變、晉王憤恨、欲回軍攻之。夫人曰、公爲國討賊、而以杯酒私忿、必若攻城卽曲在於我、不如回師。自有朝廷可以論列。於是班退。天復中、周德威爲汴軍所敗、三軍潰散、汴軍乘我。晉王危懼、與周德威議、欲出保雲州。夫人曰、存信本北方牧羊兒也。焉顧成

敗。王常笑王行瑜棄城失勢被人屠割、今復欲效之何也。王頊歲避難達鞏幾遭陷害。賴遇朝廷多事、方得復歸。今一旦出城、便有不測之變、焉能遠及北藩。晉王止行。居數日、亡散之士復集、軍城安定。夫人之力也」とある。引用した『北夢瑣言』の文は、中華書局 唐宋史料筆記所收『北夢瑣言』の校勘に従った。○其の下も又……『資治通鑑』前引の條の下文に、「劉夫人無子、克用寵姬曹氏生存最。劉夫人待曹氏加厚。克用以是益賢之、諸姬有子、輒命夫人母之。夫人教養、悉如所生」とある。○通鑑は、「是の……『資治通鑑』前引の條、李存信が北に逃げることを勧める文の上文に、「召諸將議走保雲州。李嗣昭・李嗣源・周德威曰、兒輩在此、必能固守。王勿爲此謀搖人心」とある。○五代史嗣昭……『新五代史』卷三十六 義兒傳第二十四 李嗣昭傳に、「太祖大恐、謀走雲州。李存信等勸太祖奔於契丹。嗣昭力爭以爲不可、賴劉太妃亦言之、乃止」とある。○而るに舊書……『舊書』とあるが「新書」の誤りであろう。○汴の師來り……『舊唐書』卷一百八十二、列傳第一百三十二、朱瑄傳に「秦宗權之盛也、屢侵鄭・汴。朱全忠爲賊所攻、甚窘、求救於瑄。瑄令朱瑾出師援之、擊敗秦宗權。全忠乃與瑄情極隆厚。全忠狡譎翻覆、虎視藩鄰……景福末、與弟瑾合兩鎮之兵、與汴人大戰于魚山下。瑄・瑾俱敗、兵士陷沒。汴將朱友裕以長塹圍之。乾寧四年正月、城中食竭。瑄與妻榮氏出奔、至中都、爲野人所害、傳首汴州。榮氏至汴州爲尼。」と有る。○瑄出奔し野……『新唐書』卷一百八十八、列傳第一百一十三、朱宣傳に「全忠之攻宣、凡十興師、四敗績。宣才將皆盡、益內沮、度不能與全忠確、則固守、增堞深溝爲不可逼。明年（乾寧四年）、葛從周密造舟于塹、師人踰而升。宣出奔、爲民所縛、追至、執以獻。全忠斬之而納其妻。」と有る。○瑄城を棄て……『資治通鑑綱目』卷五十三の綱に「朱全忠克鄆州、執朱瑄。進襲兗州、克之。朱瑾奔淮南。」と有り、目に「瑄棄城走、野人執之以獻。全忠入鄆州、以龐師古爲天平留後。朱瑾留大將康懷貞守兗州、自與河東將史儼・李承嗣掠徐境以給軍食。全忠遣從周將兵襲兗州、懷貞降。從周入兗州、獲瑾妻子。瑾及儼等帥其衆奔淮南。全忠納瑾之妻、引兵還。張夫人請見之。瑾妻拜、夫人答拜、且泣曰『兗・鄆與司空約爲兄弟。以小故恨望、起兵相攻、使吾奴辱

於此。他日、汴州失守、吾亦如吾奴之今日乎。』全忠乃出瑾妻、而斬瑄。」と有る。○太祖已に朱……『新五代史』卷十三、梁家人傳第一、太祖元貞皇后張氏傳に「太祖已破朱瑾、納其妻以歸。后迎太祖於封丘、太祖告之。后遽見瑾妻、瑾妻再拜、后亦拜、悽然泣下曰『克鄆與司空同姓之國、昆仲之間、以小故興干戈、而使吾奴至此。若不幸汴州失守、妾亦如此矣。』言已又泣。太祖爲之感動、乃送瑾妻爲尼、后嘗給其衣食。」と有る。○瑾淮南に歸……『新五代史』卷四十二、雜傳第三十、朱瑾傳に「瑾將康懷英等以城降梁。瑾等將麾下兵走沂州、沂州刺史尹處實不納。……行密累表瑾東南諸道行營副都統・領平盧軍節度使・同中書門下平章事。行密死、渥及隆演相繼立、皆年少。徐溫與其子知訓專政、畏瑾、欲除之。瑾乃謀殺知訓。嘗以月旦遣愛妾候知訓家、知訓強通之。妾歸自訴、瑾益不平。屢勸隆演誅徐氏、以去國患、隆演不能爲。既而知訓以泗州建靜淮軍、出瑾爲節度使。將行、召之夜飲。明日、知訓過瑾謝。延之升堂、出其妻陶氏、知訓方拜。瑾以笏擊踏之、伏兵自戶突出、殺之。初、瑾以二惡馬繫庭中。知訓入而釋馬、使相蹀鳴、故外人莫聞其變。瑾攜其首馳示隆演曰『今日爲吳除患矣。』隆演曰『此事非吾敢知。』遽起入內。瑾忿然以首擊柱、提劍而出、府門已闔。因踰垣、折其足。瑾顧路窮、大呼曰『吾爲萬人去害、而以身死之。』遂自刎。潤州徐知誥聞亂、以兵趨廣陵、族瑾家。瑾妻陶氏臨刑而泣。其妾曰『何爲泣乎。今行見公矣』陶氏收淚、欣然就戮。聞者哀之。」と有る。○北夢瑣言も……『北夢瑣言』卷十七に「梁祖魏國夫人張氏、碭山富室女。……張賢明有禮、溫雖虎狼其心、亦所敬伏。……初、收克・鄆、得朱瑾妻。溫告之曰『彼既無依、寓於輜車。』張氏遣人召之。瑾妻再拜、張氏答拜、泣下謂之曰『克・鄆與司空同姓之國、昆仲之間、以小故尋干戈、致吾奴如此。設不幸克州失守、妾亦似吾汴之今日也。』又泣下、乃度爲尼。張恆給其費。張既卒、繼寵者非人。及僭號後、大縱朋淫、骨肉聚麀、帷薄荒穢、以致友珪之禍、起於婦人。殆能以柔婉之德、制豹虎之心。如張氏者、不亦賢乎。」と有る。



【現代語譯】

鄒國公の死についての記事を、『舊唐書』は「武徳二年五月」に記し、『新唐書』は「(武徳二年)八月」に記している。『通鑑綱目』を見てみると「皇泰二年八月、唐の鄒國公が亡くなられた」とある。この隋の皇泰二年は、唐高祖の武徳二年のことである。『通鑑綱目』が鄒國公の死を八月にしているのは、『新唐書』と同一である。

突厥が劉武周を殺したことは、『舊唐書』は武徳三年秋に記しており、『新唐書』は武徳五年秋に記してある。考えてみるに、『通鑑綱目』は「秦王李世民が宋金剛を攻撃してこれを破り、劉武周と宋金剛は敗走して死んだ」と書しており、(それは)武徳三年夏四月にある。そして『通鑑綱目』の分注には「この時劉武周は宋金剛が敗れたのを聞き、懼れをなして突厥に逃げ入り、そこに長らく居たが馬邑に逃げ歸ることを謀り、その事が漏洩して突厥に殺された」としている。そこに「長らく居た」といっていけば、それは當然時を同じくした事ではない。恐らく劉武周が(突厥に)逃げたことは武徳三年であって、そして(突厥に)殺されたのは武徳五年であったのだ。

皇太子建成が、劉黑闥を打ち破った。(このことについて)『舊唐書』は「武徳五年冬」の所に書かれており、『新唐書』は「六年春」の所に書かれている。考えてみるに、『資治通鑑綱目』には「武徳五年冬、淮陽王道元が劉黑闥を攻撃したが、負け滅びた。十一月に始めて建成を派遣して劉黑闥を攻撃させた。十二月に軍隊は昌樂に到着し、劉黑闥は逃げ去った。六年正月に諸葛德威が劉黑闥を捕えて、(太子に)送った。(太子は)これを殺した」とある。これには、劉黑闥を打ち破ったのは五年冬の所に書いてあり、劉黑闥を殺したのは六年春の所に書かれている。『舊唐書』が、この二つの事を同時に書いているのは誤りである。

『舊唐書』に「元和四年十月、鄧王寧を皇太子に立てて、大赦を行った」とある。『新唐書』が(鄧王寧を)太子に立

てる事跡は、この年の閏三月に記載され、大赦は十月に記載されている。『資治通鑑綱目』を見ると「この年の閏三月に罪人を自由にし租税を減らすことを決めた」とある。この記事はつまり大赦である。また同月に「鄧王寧を立てて皇太子とした」と記している。太子を立てる記事が閏三月にあるのは、『新唐書』と同じである。そうであるなら『資治通鑑綱目』において、大赦は前に記載され、太子を立てることは後に記載されているので、太子を立てたのが原因で大赦をしたのではないのである。この三書の記述はすべて一致していない。まだどの書が正しいのかはわからない。

李密が書信を唐公李淵に送り、自らが盟主たらんと思ひ、唐公は返書するに及んで、僞って（李密が盟主であると）推戴した事は、『舊唐書』は翟讓を殺した後に敘述しており、『新唐書』は翟讓を殺す前に記してある。思うに、李密が翟讓を殺した後に、（李密の）聲望や勢力が益々盛んになっていければ、書信を高祖（李淵）に送ったのはまさにこの時（翟讓を殺した後）にあるべきである。けれども『資治通鑑』と『通鑑綱目』はともにこの事を翟讓を殺す前に敘述している。思うに、李密が興洛の官倉を奪取してから、翟讓は李密を上に見て魏公と呼稱しているのだから、（李密は）群雄の中の大きな存在であった。しかし唐祖李淵は義兵を起こそうとしていたのであって、その勝敗の行く先は知るべくもなかった。だからこそ李密は（自らの）勢力が（李淵を）凌いでいるとして、自分が盟主であるとする思ひがあったのである。唐祖李淵もまた僞って（盟主として）推戴し李密を驕慢にさせたのである。李密が翟讓を殺す時には、唐祖李淵はすでに長安を抑えており、李密がどうしていまだに（自らの）勢力が李淵を凌いでいるとするであろうか。『通鑑綱目』の記している箇所をみれば、前後の状況は自ずからわかる。『舊唐書』は誤りとすべきである。

『舊唐書』は江夏王道宗傳について、「高麗を伐つ時、道宗は李靖とともに先鋒となった」とある。『新唐書』の場合は、「李勣とともに先鋒となった」と云っている。考えてみるに、李靖傳には「遼を伐とうとしている時、李靖はすでに年老いていた。太宗は李靖を任用したいと考えていたが、やはり年老いていたため任用出来なかった」とある。かえって

李勣が本當に行軍していたので、道宗と先鋒だったのは李勣である。李靖ではないのである。『舊唐書』は誤りである。『舊唐書』魏元忠傳に「魏元忠が周興に獄にくだされ、市に至って今にも處刑されようとした時に、則天武后が魏元忠に敬業を平定した功績があることによって、死罪は免除し、貴州への流刑にした。(魏元忠が) ちょうど處刑される時に、則天武后が先に聲で一報を伝えさせたので、處刑を司る者はあわてて魏元忠を釋放しようとした。しかし、魏元忠は『詔敕の眞僞はまだわからないのですから、どうしてあわてる必要がありますでしょうか』と言ひ、靜かに宣敕を待ち、そうした後で起ちあがり赦されたことに禮を述べた。まもなく詔によって朝廷に戻り御史中丞に任じられた。また來俊臣と侯思止に陥れられ、再び嶺南に流された」と。『新唐書』は、この處刑される際に(則天武后が) 許しを傳えた事を、來俊臣に陥れられた(時のこと) としている。そして、來俊臣が獄に下す前に、先に周興に陥れられ死罪になるところを、揚州と楚を平定した功績により流刑になった(という記述があり)、俊臣の獄の後に、侯思止に陥れられ、そうして嶺南に左遷された(と記されている)。このように魏元忠は、合計三回流されている。周興の獄は一度目であり、來俊臣の獄は二度目であり、侯思止の獄が三度目である。『舊唐書』は、周興による一度目と、來俊臣と侯思止とを併せて一度として、合計二度流されたとするだけである。そうはいつても『舊唐書』は「(魏元忠が) 前後三回流されたので、則天武后が『お前は どうして何度も譴られるのか』と質した」とも記している。それならば魏元忠が武后の御代に流されたのは、合計三度である。當然『新唐書』を正しい記述をとすべきである。

『舊唐書』は、敬暉等が張易之兄弟を誅殺した時、薛季昶は武三思等も併せて誅殺することを勸進したが、敬暉と張柬之は首を縦に振らなかつた。武三思が韋皇后に付き權柄を握るに及んで、張柬之は嘆いて言った、「主上、昔日は勇敢苛烈であると稱された。私は諸武(武三思一黨)を朝廷に留めてしまったが、(それを) 主上御自ら誅殺されることを切に願うだけである」と、とする。これは『舊唐書』では、諸武を誅殺しなかつたのは、敬暉と張柬之の過ちからく

るものである。『新唐書』は、敬暉と桓彥範の傳で、薛季昶が（諸武も誅殺すべきだと）勸進した時、敬暉もまた（薛季昶と同様に）努めて諫言したが、桓彥範が従わなかった、と記している。これは敬暉もまた諸武を誅殺しようとした者であり、その過ちは桓彥範に由来するのである。（『新唐書』では）また、「諸武を朝廷に留め、主上御自ら誅殺することを待つ」という語は桓彥範の言葉にしている。今、『資治通鑑』を参考してみれば、「二張（張易之兄弟）が誅殺された時、薛季昶が張柬之と敬暉に向かつて言った、『二凶は除かれたといっても、産・祿（前漢の呂氏一族）はいまだ健在であり、草を刈り去っても根を除去しなければ、しまいにまた（二凶のような者が）現れてきてしまう』と。二人は言った、『大事はもうすでに定まっており、奴らはもうまな板の上の肉に過ぎぬ』と、としている。つまり敬暉と張柬之の兩人もあえては諸武を誅殺しようとしてはおらず、『舊唐書』と同様の記載である。「諸武を朝廷に留め、主上御自ら誅殺することを待つ」という語は、また（『資治通鑑』は）張柬之の言葉としている。そうであるならば、當然ながら『舊唐書』を是とすべきである。

『舊唐書』に、「王同皎は武三思を殺すことを謀っていたが、かえて共に計畫していた冉祖雍に密告され、殺された」とある。『新唐書』は、「宋之遜の兄之問は、以前、同謀の張仲の家に住んでいたためその事を知り、之遜の子の曇に命令して、密かに武三思に知らせた」と謂っている。考えてみるに資治通鑑に、「宋之問及び弟の之遜は、そこで密かに武三思に知らせた。遂に人を使って、王同皎が武當の丞周憬等とともに武三思を殺そうと謀り、また、皇后を廢立しようとしている事を告げさせた。そのため、（王同皎一黨は）皆連坐して切り殺された。之問と之遜は、京官の職を賜った」とある。このことによると、王同皎の計畫を密告した者は、之遜の兄弟（の中の人物）である。まして冉祖雍については、もともと武三思一黨であり、五狗の一人であるのだから、王同皎はどうして、この人物と一緒に謀をめぐらすなどという事を、肯えてするだろうか。當然、『新唐書』の方を正しいとするべきである。

『舊唐書』は「王鉞の権力が絶大であった時、李林甫であっても彼のことを恐れていた」と記し、『新唐書』は「王鉞は皇帝（の信賴）を得ているとはいっても、李林甫に恐れをいだき、謹んで彼に仕えた」と記している。『舊唐書』安祿山傳に「李林甫が宰相であった時、朝臣で對等の禮で接する者は一人もいなかった。安祿山が（李林甫のもとに）やって来て謁見したが、それほどかしこまり敬するわけではなかった。李林甫が王鉞を呼ぶと、王鉞がやってきたが、その赴き拜謁する様子はとてもへりくだったものであった。そのため安祿山は李林甫を恐れ喘いだ」とあることから考察すると、王鉞が李林甫に仕えた態度は誠にへりくだったものであった。『舊唐書』はこの事を安祿山傳で詳細に記載しているのに、それなのに王鉞傳では反對に「李林甫も彼のことを恐れていた」と記している。それはどうしてなのか。

『舊唐書』の韋見素傳は、安祿山と楊國忠が（玄宗の）寵愛を受けることを争った時、韋見素は（そのことに）是非をとなえることもなく、遂に（安祿山が）謀叛を起こすこととなっても、ひと言も發言している描寫がない。『新唐書』の韋見素傳は、「安祿山が異民族の武將三十二人を漢人の將と代えたいと請願したとき、韋見素は皇帝に力説して、『安祿山が謀反することははっきりと明らかであります』と言った」としている。考えてみるに、『資治通鑑綱目』の分注は、「この時韋見素は楊國忠に對して言った。『安祿山が叛くのは明らかである』と。翌日入見して、皇帝は迎え入れて（彼らに）對して言った。『おぬしらは祿山を疑うておるのか』と。韋見素は『謀叛の痕跡がすでに有ります』と遠慮せず言い、皇帝は喜ばず、結局安祿山の請願に従った』とする。『新唐書』と同じである。當然『新唐書』の記述を是とすべきである。

『舊唐書』の安祿山傳に、「楊國忠は幾度も『安祿山は必ず謀反します。』と上奏した。天寶十二年に、玄宗は輔璆琳に命令して祿山の様子をうかがわせたが、璆琳は祿山から多くの賄賂を受けて歸還し、盛んに祿山の忠臣ぶりを褒め稱えた。楊國忠は又、『祿山を呼び寄せても、必ず來ることはないでしょう。』と言った。そこで祿山を呼び寄せた。十三年、

祿山は華清宮で玄宗に拜謁し、玄宗はそのまま祿山を左僕射として、歸らせた。」とある。『新唐書』の安祿山傳では、「十三年、安祿山は華清宮に來て玄宗に拜謁した。明年、楊國忠は計略にかけて祿山に宰相の位を授けようとしたが、詔敕がまだ下らないうちに、玄宗は輔瑒琳に大柑を下賜させ、そのついでに祿山の様子を見てこさせた。瑒琳は多くの賄賂を貰って歸り、『言うべきことは有りません』と言ったので、玄宗はそのまま祿山を呼び出さなかった。」とある。

『舊唐書』に依據すれば、瑒琳が遣いしたのは十二年のことであり、『新唐書』に依據すれば十四年のことである。今考えるに、『資治通鑑』・『通鑑綱目』の二書には、「十三年に安祿山が入朝した。玄宗は平章事（宰相）の位を加えようとしたが、楊國忠が『祿山は文盲です。』と言ったので、そこで左僕射にした。十四年、楊國忠は又、祿山を平章事のように願ひ出て、祿山を呼び出して入朝させ、賈循等に祿山が率いる部下を分けて治めさせようとした。玄宗はこれに従った。すでに詔敕が起草されたが、まだ發布されないうちに、玄宗は瑒琳を遣わして祿山の様子をうかがさせた。瑒琳は賄賂を受けて歸り、『祿山に二心はありません』と言った。玄宗は楊國忠に『祿山には絶對謀反の心はない。朕が保證する。卿は祿山のことを憂えてはならない。』と言ひ、そうして祿山を呼び出すことは沙汰止みとなった。正しく『新唐書』と同じであるので、當然『新唐書』を正しいとするべきである。

貞元三年に射生將の韓欽緒等が妖僧李廣弘と謀反を計畫したことについて、『舊唐書』德宗本紀は「韓欽緒が韓游瓌の子を以て之を 彼を特赦した」と記している。これに對して、『新書』德宗本紀は「韓欽緒が誅戮に服した」と記している。按ずるに『舊唐書』韓游瓌傳は「李廣弘が謀反を計畫していることが發覺した。德宗は内官に命じて彼ら一黨を捕まえさせ、斬首させた」と記しており、欽緒が殺されたのか、はたまた赦されたのかは明言してはいない。『新唐書』韓游瓌傳に「韓欽緒は邠州に逃げたが、宦官たちが捕えて斬った。そのことを札に記して韓游瓌に示した。韓游瓌は恐怖した。同時に韓欽緒の二子を虜にし、京師に送った。そのため皇帝は韓游瓌を許した」とある。ここで「捕へて斬る。

狀を以て游環に示す」と言っているので、韓欽緒は已に斬られていることがわかるのである。まして韓遊環は誅されることに恐怖し、同時に韓欽緒の子を京師に送っているのではないか。どうして韓欽緒の記事を避ける必要があるうか。『資治通鑑』に「韓欽緒は邠州で抵抗することができなかった。手枷足枷をされて京師に送られ、軟奴「韓遊環のこと」等と一緒に腰斬された」とある。この文章の韓欽緒が誅に服したことは、『資治通鑑』『新唐書』とまったく同じである。『舊唐書』が記している「之を赦す」とは、誤りであろう。欽緒の子を赦したことによって、欽緒を赦すしてしまったにすぎない。

魚朝恩の死について。『舊唐書』では、「主上が魚朝恩の觀軍容使の職を罷免させ、寒食に際してその宴に入り、詔を出して魚朝恩を留まらせた。魚朝恩は懼れ、言動がとて不遜であったが、主上もこれを責めなかった。この日、(魚朝恩は)邸宅に歸り首を括って自殺した」とする。『新唐書』では、「宴が終わり、魚朝恩は營在に歸ろうとしたが、詔を出して彼を留まらせた。皇帝は(魚朝恩の)二心あることを責め、左右の者に命じて魚朝恩を捕らえ縊り殺させたが、(その事は)外部で知る者が無かった。翌日詔を下して、(魚朝恩の)觀軍容使を罷めさせた。(眞實を知るよしもない)外部の間人は皆『既に詔を奉じて後、自ら首を括って死んだようだ』と言った」と記している。『通鑑綱目』の記述している箇所も『新唐書』と合致している。なので『舊唐書』が記しているような、官職を罷めた後に自ら首を括って死んだとするのは間違いである。恐らく、唐代の國史はもともとこの事を忌避し、『舊唐書』はただその舊來の例に則り、改訂するのに時間がなかっただけなのであるう。

『舊唐書』の第五琦傳に、「賀蘭進明が第五琦を遣わして蜀中の玄宗に上奏させると、玄宗は大いに喜んで、第五琦を江淮租庸使に命じた。」とあり、『新唐書』の第五琦傳には、「肅宗が彭原におり、第五琦は肅宗への上奏をおえてから、『今現在の急務は資金にあります。』と言ったので、肅宗はそこで第五琦に江淮租庸使を擔當させた。」と言っている。

(第五琦が江淮租庸使になったのは、『舊唐書』に據れば玄宗が命じたのであり、『新唐書』に據れば肅宗が命じたのである。按ずるに、『資治通鑑』には、「賀蘭進明は參軍の第五琦を遣わして蜀に入り上奏させた。第五琦が『今兵を用いるのには、租税による収入が急務であり、税が見込める土地の中では、江淮が人口も多いです。私に官職を與えて徴税させて下されば、軍を資金不足にさせません。』と言ったので、玄宗は喜んで第五琦を租庸使にした。」とある。『通鑑綱目』には、この事を書くのに、玄宗が冊立の書と玉璽によって肅宗に帝位を嗣がせる前に記している。そうであるならば、第五琦が租庸使となったのは、まだこれは玄宗が命じたのである。當然『舊唐書』を正しいとするべきである。『新唐書』李泌傳に、「徳宗が李泌に『人は盧杞を奸邪であると言うが、朕にはこれがよく分からぬ。』と言うと、李泌は『これこそ盧杞が奸邪である點です。』と言った。」とある。『舊唐書』盧杞傳と李勉傳は、ともにこの言葉を李勉の發言としていて、李泌傳は(この言葉を)載せていない。『資治通鑑』と『資治通鑑綱目』を見ると、徳宗は李泌と即位以來の宰相について論じ、「盧杞は忠誠廉潔であり、頑固な男だ。その奸邪について言うのは、朕はまったく實感湧かぬ。」と言うと、李泌は「これこそが盧杞の奸邪である點なのです。もし陛下に盧杞が奸邪であるとの自覺があれば、どうして建中の亂が起きたでしょうか。」と言っている。『新唐書』と同じである。『舊唐書』に李勉の發言とするのは、誤りであるはずだ。

『舊唐書』の本紀は、貞元元年正月の條に、はじめて顔眞卿は李希烈に殺されたことが聞奏され、(顔眞卿は)司徒を追贈されて、文忠と諡されたとしている。『新唐書』の本紀は、貞元元年八月の條に、「李希烈が宣慰使顔眞卿を殺した」とする。『舊唐書』に據れば、この年(貞元元年)の正月にはすでに顔眞卿が殺害されたと聞奏されていれば、殺害されたのはそれより前ということになる。『新唐書』に據ってみれば、この年になってはじめて殺害されたことになる。

『通鑑綱目』を参考してみると、「興元元年八月、顔眞卿は李希烈に殺され、貞元元年正月に顔眞卿に司徒を追贈し、文



忠と諡した」とある。つまり、顔真卿は興元元年八月に殺害され、諡を翌年正月に贈ったとしているのは『舊唐書』と同じである。『新唐書』はおそらく、誤って上年（興元元年）八月をこの年（貞元元年）の八月としただけであろう。『舊唐書』には、「武宗の會昌元年九月、幽州軍が叛亂し、その節度使の史元忠を放逐し、牙將の陳行泰を推擧して留後とした。八月、（幽州の）雄武軍使張絳が『陳行泰は殘虐で將帥の器ではありません。』と上奏し、自らの鎮軍で陳行泰を討つことを請願したので、これを許すと、そのまま陳行泰を誅伐したので、詔して張絳に兵馬使を司らせ、明年二月には、令を下して留後の事を司らせ、仲武の名を下賜した。」とある。このように、張仲武はつまり張絳である。（しかし）『新唐書』には、「盧龍軍の將の陳行泰が、その節度使の史元忠を殺し、自ら留後を稱した。閏九月、（同じ盧龍）軍の將の張絳が陳行泰を殺し、自ら留後を稱した。十月に、盧龍軍が叛亂して張絳を放逐すると、雄武軍使の張仲武が幽州に入った。」と言っているのです。つまり、張仲武と張絳とは明らかに（別の）二人である。考えてみると、『新唐書』藩鎮傳に、「陳行泰は節度となることを求めたが、まだ返答がないうちに、次將の張絳が陳行泰を殺し、將帥となることを求めたが、武宗は自ら、張仲武にこれと代らせた。」とあり、又、『資治通鑑』には、「盧龍軍が叛亂し、節度使の史元忠を殺し、陳行泰を推擧して留後の仕事を司らせ、その後また叛亂して陳行泰を殺し、張絳を擁立した。ちょうど雄武軍使の張仲武が兵を起して張絳を攻撃し、同時に軍吏を派遣して表を奉ると、李德裕は、その言説や筋道の立て方が、陳行泰や張絳に較べて恭順であるので、その行爲は許すことができる、として、そこで詔を下して張仲武を留後とした。」とある。これは、『通鑑』の記していることと、『新唐書』の記していることとは、（内容が）符合するので、張仲武と張絳とは、明かに二人の人間である。『舊唐書』が、「張絳は仲武の名を下賜された」と言っているのは、誤りである。

『舊唐書』に「大中四年、九月、幽州節度使の周綝が死亡した。軍中の者は牙將の張允伸を推戴して留後とした」とあ

る。(これに對して)『新唐書』には「盧龍で反亂があり、節度使の張直方を追放した。牙將の張允仲がみずから留後を稱して反亂軍を攻めた」とある。藩鎮傳に「張仲武が死亡した。子の張直方が留後を繼いだが、部下達が反亂するのを憂慮し、都に逃げた。そのため軍中張允仲を推戴して留後とした」とある。これは張允仲の死の前は、張直方であり周琳という人物ではない。しかし、『舊唐書』張允仲傳には「大中四年、戎帥周琳は病氣で寝込み、張允仲を留後とした」とあるので、張允仲が繼いだ留後は周琳から引き繼いだものであり、張直方の直後に引き繼いだのではないことは、誰の目にも明らかである。また『資治通鑑』に「盧龍節度使周琳が死に、軍中は張允仲に留後に就くことを要請した」と記しているので、『舊唐書』の記述と合致している。つまり、張允仲が繼いだ留後の前任者は周琳である。『新唐書』が張直方の後に張允仲が留後となったとしているのは誤りである。

『舊唐書』の鄭畋傳は、「鄭畋は鳳翔を鎮護して黃巢に抵抗したが、ちょうどそのとき病に臥せ、鎮護している地(鳳翔)が賊軍に抗爭する上での要衝に當るので武將を採用するべきだとし、そこで李昌言を推薦して自らの代わりとして、自身は行在に赴いた」とある。『新唐書』は、「鄭畋は鳳翔府に居り、司馬の李昌言が彼を襲撃した。鄭畋は甘言を弄して言った。『あなたはよく兵を收め人民を慈愛し、國の爲に賊を討ち滅ぼすことができるから、ここを守護するがよろう』と。そこで軍を李昌言に委ねて去っていき、李昌言は留後であると自稱した」としている。これはつまり鄭畋が鳳翔を去ったのは、實に李昌言が彼を追い拂ったからなのである。『資治通鑑綱目』の分注でもまた、「李昌言は興平に居り、軍に對する褒賞がやや少なかったため、麾下の軍衆を煽り激怒させ、軍を引き還して鳳翔の府城を襲撃した。鄭畋は府城に登って李昌言に甘言を弄して、そして自分の務めを(李昌言に)託し、その日に西にある行在に赴いていった」としている。『新唐書』の書き記すところと同じである。『舊唐書』は誤りである。

『舊唐書』の代宗本紀に、「寶應元年冬、賊の范陽尹李懷仙が、史朝義の首を斬り、來朝して獻上し、降伏することを

請い願った。」とある。史朝義傳にもまた、「朝義は幽州に敗走したが、賊の將帥李懷仙がこれを莫州で生け捕りにし、内通して來朝降伏し、朝義の首級は天子の御前にもたらされた。」と言っている。『新唐書』の代宗本紀には、「史朝義は自殺し、その將李懷仙が幽州を率いて降伏した。」と言っており、史朝義傳にも「朝義は先ず莫州に逃走し、田承嗣は朝義を騙して、幽州に歸らせて、李懷仙の兵を率いて再戦させようとし、朝義が莫州を出ると、承嗣はそこで城を率いて官軍に降った。朝義は范陽に着いたが、懷仙の部將李抱忠が城に入れなかった。朝義は兩番に亡命しようと考えたが、懷仙が招くので幽州まで行き、自ら首を括って死んだ。懷仙は朝義の首を斬り、長安に送った。」と言っている。

この『新唐書』の記事に據れば、朝義は先ず莫州に至り、後に又、幽州に至って首を括り死んだのであり、莫州で捕らわれたのではない。『通鑑綱目』はこの事件を書いて、「賊將の田承嗣は莫州を率いて降り、李懷仙は朝義を殺して、その首を京師に送った。」と言っており、その分注にもまた、「朝義は何度も敗れた。田承嗣は朝義に説いて、幽州に往き、兵を起させようとした。朝義が出發すると、承嗣は降伏した。この時、朝義が任命した范陽節度使の李懷仙は、すでに降伏しており、朝義は范陽に着いても城に入れなかった。そこで東に逃げて契丹に入ろうとしたが、懷仙が兵を遣わして朝義を追った。朝義はそのまま自ら首を括り、懷仙は朝義の首を斬って献上した。」と言っている。(『綱目』に)記している内容は、『新唐書』と少し異なるとはいえ、しかし、幽州に着いてから首を括った、とするのは同じである。莫州で捕まったのではないということは、當然『新唐書』の記述を典據とすべきである。

『舊唐書』楊復光傳に「黃巢が江西の地に侵攻した。楊復光は吳彥弘を派遣して、黃巢を諭し投降させた。黃巢は尚君長に上表文を奉じさせて唐王朝に歸屬した。宋威は楊復光が功績を擧げることがを嫌い黃巢を攻撃した。黃巢は怒りふたたび亂が起きた。朝廷は尚君長を誅殺した」とある。(これに對して)『新唐書』楊復光傳には「宋威が王仙芝を攻撃した。楊復光が使者を派遣して賊軍に投降することを約束させた。王仙芝が尚長君を派遣して約束の通りにことを運んだ

が、宋威が楊復光の功績をねたんで密かに使者の尙長君を誅殺することを朝廷に願ひ出た。そのため王仙芝は怨みに思ひもう一度反旗を翻した」と記している。『新唐書』黄巢傳にも「楊復光が吳彦宏を派遣して詔によって賊軍を悟らせた。王仙芝は蔡溫球・楚彥威・尙長君を派遣して來りて投降させた。(しかし)宋威は偽りで彼らを許し、(裏では)

『尙長君と戦つて、あいつを捕虜にしました』と朝廷に報告し、尙長君を斬首してしまった。(そのため)王仙芝は怒り、本據地に戻り洪州を攻めた」とある。『舊唐書』に依據すれば、尙長君を派遣した人物は黄巢であり、『新唐書』には依據すれば王仙芝である。このことを考えてみると、『資治通鑑綱目』には「乾符四年冬、王仙芝が尙長君を派遣し投降することを願ひ出させた。宋威がこれを捕まえて朝廷に送り、斬首にした」と明記されている。しかも三年の冬の分注には「王仙芝が蘄州を攻めた。刺史の裴渥が奏官につくことを許した。左神策軍押牙の官を授けた。王仙芝はとても喜んだが、黄巢は怒り心頭で、『王仙芝だけが官職をもらつて歸ろうとしている。この五千餘の將兵をそのまま歸らせることなどしようか』と言つた。(そのため)王仙芝は封官の命を受けずに、軍を二つに分けて、二千餘人を王仙芝と尙君長に従わせ、残りの二千餘人を黄巢に従はせて、それぞれは異なる道で歸つていった」と記されている。そもそも蘄州において兵を分けた後に、尙君長は常に王仙芝に隨つていたのであり、決して黄巢のもとにいたのではない。そうであるならば尙君長を派遣して投降させた人物は、王仙芝その人であり、黄巢ではないのである。當然『新唐書』を正しい記述をとすべきである。

『新唐書』沙陀傳に、「天復元年、李克用は汴兵(朱溫の兵)に敗北を喫した。朱友寧が追撃して太原を包圍した。李克用は李嗣昭・周德威と雲中に逃走することを謀り、李存信は『北番(夷狄)に逃げ込むに越したことはない』と言つた。李國昌の妻劉氏が李克用に語つて言つた。『王(晉王つまり李克用)はかつて王行瑜が居城を失ひ逃走して死んだことを笑われになりました。どうしてこのことに倣おうとされるのですか』と。李克用は迷いがさめてそこで止まつた」

とある。(『新唐書』の)この記述に據れば、李克用に止まることを勧めた人物は、李國昌の妻である。李國昌は李克用の父親である。その妻であれば李克用の母親である。けれども『新五代史』唐家人傳に、「李克用の妻劉夫人は頭腦明敏で知略に富んでいた。李存信が北番に逃れることを勧めた時にあたって、劉夫人は『李存信は羊飼いに過ぎず、どうして十分に事の成敗を計ることができましようか。公(李克用)はかつて王行瑜が邠州を放棄したため敵に捕らわれてしまったことを笑われました。今また御自身がこのことをなされようとするのですか』と言った」としていれば、劉夫人はつまり李克用の妻である。『資治通鑑』及び『北夢瑣言』もまた、「李克用の妻である劉夫人が李克用に(逃げずに止まって)守備に専念することを勧めた」といっており、その下文にもまた、「劉夫人に子は無く、姫妃の曹氏が李存勗を生んだ。劉夫人は曹氏を厚く待遇した」といっている。これはつまり、劉夫人が李克用の妻であることは明らかである。けれども、『新唐書』が(劉夫人を)李國昌の妻であるとするのは何に依據したのか知れない。また『資治通鑑』は「この時李克用はとても恐れをなした。李嗣昭と周德威は言った。『我らがここに居ります。必ずや守り通しましうぞ』と」として、『新五代史』李嗣昭傳にもまた、「李存信が雲州に逃れることを勧めた時、李嗣昭は言い争って、そうすべきではないと主張した」といっている。つまり(周德威・李嗣昭の)二人もまた、出奔する策を主導してはいない者たちである。そうであるのに『舊唐書』に「二人(周德威・李嗣昭)と雲州に逃走することを謀った」といっているのは、これまた誤りである。

『舊唐書』の朱瑄傳に、「汴の朱全忠の軍が攻めて来て、瑄とその妻は逃げ出したが、民に殺されて、瑄の首は汴州に送られ、妻は汴に着いてから尼となった。」とある。『新唐書』には、「瑄は逃げ出したが、民に捕らわれ(朱全忠に)献上され、朱全忠は瑄を斬って、その妻を手に入れた。」とある。『通鑑綱目』の分注には、「瑄は城を棄てて逃走し、民に捕まって(朱全忠に)献上された。その弟の朱瑾は、當時兗州を守っていたが、その武將の康懷貞を留め城を守ら

せ、自分は出陣して朱全忠の兵糧を盗んで自軍に與えていた。全忠が武將を遣わして兗州を襲い、瑾の妻子を獲えさせると、瑾は淮南に逃げた。全忠が瑾の妻を手に入れて歸還すると、(朱全忠の妻の)張夫人が彼女に會うことを願った。瑾の妻が拜伏すると、張夫人もまた拜伏し、さらに言った。『朱瑾・朱瑄と司空とは、誓いを立てて兄弟となったのに、小さな理由から兵を起して攻め合い、お義姉様をここに辱めている。いつの日か、汴州が落ちることがあれば、私もまたお義姉様の今の状態の様に辱められるでしょう。』と。全忠はそこで瑾の妻を城から出して、瑄を斬った。』と云っている。『新五代史』梁家人傳に、「太祖(朱全忠)は、朱瑾を破ると、その妻を手に入れて歸還した。張后は瑾の妻に會い、云々『綱目』と同じ。』。太祖はそこで瑾の妻を送り尼にして、張后は常に衣食を與えた。」とある。『綱目』と『新五代史』二書の記述を合せてこの件を見てみると、朱全忠が手に入れたのは、瑾の妻であつて、瑄の妻ではない。『舊唐書』が、「瑄の妻は汗に着いて尼となつた」と言い、『新唐書』が、「朱全忠は瑄を斬ると、その妻を手に入れた。」と言っているのは、どちらも瑄の妻であると言っている。ただ『新五代史』はもともと歐陽脩の著作であるし、『新唐書』もまた歐陽脩が全てを掌つて著されたものであるのに、どういふわけで互いに照らし合せて訂正しなかつたのだろうか。又、『新五代史』の朱瑾傳を見ると、瑾は淮南に身を投じた後、徐知訓を殺し、その家族は族殺された。瑾の妻の陶氏は、刑に臨んで泣いたが、瑾の妻が、『どうして泣くのですか。今から旦那様に會うのですよ。』と云うので、陶氏は涙を止めて、嬉しそうにして殺された。」とある。これはきつと、江南に逃げ出した後、また娶つた妻のことである。『北夢瑣言』も朱全忠が手に入れたのは瑾の妻だとしている。』。

(大兼健寛・新名主考美・關 清孝・田中良明)